# 師範國文

第一部用　卷五

375.9
Y19
資料室

42636
教科書文庫
4
810
51-1938
200030
1910

375.9
Y019
資料室

文部省檢定濟
昭和十三年三月十五日　師範學校國語漢文科教科用

吉田彌平編
石井庄司補訂

# 師範國文

第一部用　卷五

修正再版

東京　光風館藏版

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 33914 文

# 師範國文 第一部用 卷五

## 目次


一 惠まれたる日本……鶴見祐輔 一
二 春の心……二
三 忘れ難き日……姉崎嘲風 一四
四 隱岐の御遷幸……〔太平記〕 一九
五 長谷部信連……〔平家物語〕 二六
六 永恆の瞬間……高神覺昇 三五
七 夜叉王……岡本綺堂 三九
八 新綠……五十嵐力 五一

一九　斑鳩の宮……三木露風　五八
一〇　法隆寺……高濱虛子　六三
一一　牡丹……六六
一二　人の問に答ふ……藤田東湖　六九
一三　ソクラテスの遺訓……穗積陳重　七七
一四　ヴェスヴィヤス……森鷗外　八八
一五　地圖を眺めて……吉村冬彥　九四
一六　登山……田部重治　一〇六
一七　鷲……土井晚翠　一一
一八　百蟲譜……横井也有　一一四
一九　震災雜詠……永田秀次郎　一一八
二〇　東路の旅……〔東關紀行〕　一二三
二一　月雪花……芳賀矢一　一二九
二二　秋霧……北畠親房　一三八
二三　月の夜さむ……〔新葉和歌集〕　一四三
二四　縮むものの力……相馬御風　一四七
二五　日本民族の覺悟……田中寬一　一五六

目次終



# 師範國文 第一部用 巻五

## 一 惠まれたる日本

鶴見祐輔
辯論家
衆議院議員
明治十八年(一八八五)群馬縣生

アルプス　イタリー北境の連山

布哇　北太平洋に散在する群島

紺碧の空に銀線細く曳くアルプスの山々、萬里の潮風椰子の葉に鳴る布哇の岸邊、さては古城の白堊葡萄畑のうちに隱見する伊太利の籬落、半天の風車細雨に煙る和蘭の牧場、とりぐに詩興を唆る世界の國々をそゞろ歩きの旅の幾年、假寢の枕重ねての後、大和島根の岸に歸りつく放浪の子は、欄に倚つて近づき來る故山の姿を仰ぎ見つゝ、ある異常なる感激に身振ひする。それは新しく日本を發見することなのだ。

芙蓉の峯　富士山
六連島　山口縣豐浦郡彦島村の屬島
音戸の瀨戸　廣島縣安藝郡倉橋島と鍋岬との間の水道
須磨・明石　共に神戸市の西海岸になる名所

太平洋より歸り來る遊子の前に聳ゆる芙蓉の峯、朝鮮海峽より歸り來る遊子の前に連なる六連島、さては歐洲より瀨戸内海に歸り來る遊子の前に、白浪花の如く散る音戸の瀨戸、翠黛夢に微笑む須磨・明石。

船進み、景移る。遊子は陶然として、我吾を忘れる。

何といふ美しい線であらう。何といふゆたかな色彩であらう。藍色の波の上を白帆がすべつてゆく。磯馴松の林のうちに茅葺屋根が見える。白い障子に日

瀨戸内海



があか〳〵と照つてゐる。白砂の上に曳上げた漁船のまはりに、細い絲の網が一杯にひろげてある。日傘をさして村の娘が行く。見馴れては、忘れるともなく忘れてゐた日本の優秀性が、ひし〳〵と遊子の胸に迫つてくると、こゝに新しく日本を發見し、日本人たる自分自身を發見する。

「民族の興亡はその住居する土地の氣候に因る」と或西洋の學者は喝破した。まことに道理ある言葉である。あまりに暑き南國は、天惠饒に過ぎて人心を弛緩せしめ、あまりに寒き北國は、風雪の威强きに過ぎて人間を萎縮せしめる。春夏秋冬の序宜しきを得たる溫帶地にのみ文化と文明との起る、理當に然るべきを觀る。

しかしながら、私の近年痛切に感ずることは、氣候と相並んで、風

光がその民族の優劣に偉大なる影響をおよぼす」といふことである。狂濤岩石を衝く夕には我が心荒び、春陽落花に微笑む朝には人の心は和やかである。況や綠波疊の如き長汀曲浦の夏、蜜柑の實黃に色づく山路の冬、春は吉野滿山の芳菲、秋は眼もはるかなる日光の紅葉、誰人か日本の山河のうちに生きて、生を歡喜し自然を愛するの情無きを得るものぞ。我が日本民族の思想と生活と文化との一切は實にかゝる豐潤なる自然の賜物である。

去歲の秋、私は南歐伊太利の山河に彷徨ひ、始めてこの小さな半島の中から、かゝる數多き天才と英雄との群がり起つた理由を心讀した。天蓋の如き大空は、ベニスの町の工人の磨く玻璃のやうに碧かつた。アペナインの山々には橄欖の林が微風に波

去歲　昭和七年
ベニス　イタリー北部の都會　水の都といはれてゐる
アペナイン　アルプス山の支脈　イタリーを縱斷してゐる



立ち、葡萄畑と小麥畑との續く平野には、白練を敷きたる如き流が悠然と光つてゐた。處々に古城・宮殿、さうして壯大なる天主教寺院。手の染まるやうな藍色の海。その總べての物象の上に惜しげもなく降りそゝぐ赤い日射し。かゝる氣候と風光とのうちから、シーザーも出で、ダンテも生まれ、ラファエルも育まれ、ガリレオも現れたのだ。それにつけても、日本民族は幸運であつた。天は日光と雨とを惜しむことなく吾が國土に惠み、地は深き海を以て吾が國を外

シーザー　ローマの大政治家（西暦前一〇〇―前四四）
ダンテ　伊太利の大詩人　神曲の作者（西暦一二六五―一三二一）
ラファエル　伊太利の大畫家（西暦一四八三―一五二〇）
ガリレオ　伊太利の有名な星學者　數學者（西暦一五六四―一六四二）

ベニス

敵より防衛した。大氣は貿易風となつて四邊の海に迫る外船を追ひ、山と田と川と海とは人間の求むるまゝなる諸〻の食物を堆く盛りそなへ、四時に亙つて飢うることなからしめた。

醍醐寺三寶院の庭園

外敵の脅威と生活の壓迫とから解放された日本民族は、日射しの暖なるまゝに戸外に出でて、最も健全なる生活を營んで來た。それが日本建築であり、日本衣服であり、日本庭園であつた。かゝる溫雅なる風俗を作り出でたる日本民族は、その眼に秀麗なる山河の色を見、その耳に諧調ある松籟・潮音を聽き、そ

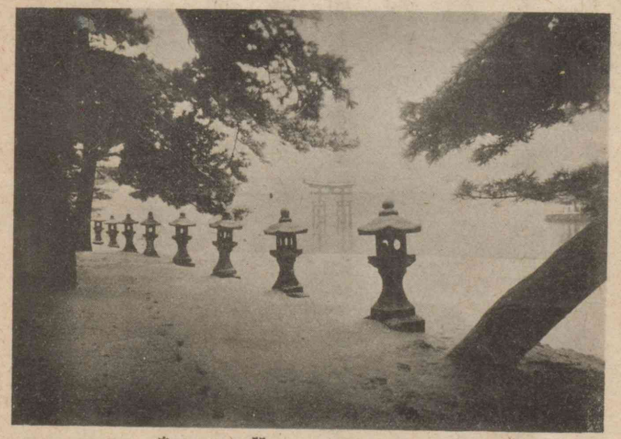


の肌に五月の薫風を感じ、その鼻に朧月夜の梅が香を嗅いだ。官能の生活に於て、日本民族の如く惠まれたる境地に住してゐるものを、世界の何處に求め出すことが出來よう。天の日本民族を愛撫する、至れり盡くせりといふべきである。

かゝる自然の恩惠に浴してゐる日本民族の心の底には、いつとしもなく强烈なる愛鄕・愛國の情操が芽生えた。それは單純なる理念より生ずる政治意識でも、利害に萌す經濟觀念でも、個人的感情に胚胎する家族思想でもなかつた。

あゝ、我等の祖先はこの島國に住んで幸福であつた。彼等は花に歌ひ、朝日に祈つた。彼等の皮下に躍る血潮の中には、夕日に映える芙蓉の峯と、春雨に煙る嚴島の情調とが流れてゐた。殊に島國の民の特色である鎖國は、我等の祖先の心をこの國土

に集中凝結させた。たゞこの國を見、たゞこの同胞を見て三千年の歳月を送り迎へるうちに、彼等はわき目もふらずこの國とこの同胞とを愛するやうになつた。永い時期を隔てて折々渡來した異邦文化は感受性の強いこの國民を驚かした。しかしその異邦文化を一度己が國土に流入せしめると、彼等はまた水門を閉ぢてこれを自己の固有文化のうちに融合せしめる努力をつゞけた。かゝる外邦隔絶性と自己集中性とは、實にこの日本人を作り上



春の嚴島



げて來た天惠であつた。

芙蓉峯（穴山儀平筆）

我々には氣の散らない民族生活をつづける暇があつたのである。多くの意味に於て、日本民族は古代希臘民族と類似してゐる。かの古のアテネの民が、城壁を以てその小さき都市國家を閉鎖して自己に沈潛し、以て固有の希臘精神と希臘文化とを築き上げたことが、この大和島根を環る海路を閉ぢて、日本精神と日本文化とを作り上げた我等の祖先と酷似してゐる。アテネの哲人政治家ペリクレスが希臘の市民はその國を愛慕する爲には、唯一目その都市を眺むるの

アテネ　ギリシヤの古代の都市

ペリクレス（西暦前四九〇―前四二九）

テルモピレー　バルカン半島の尖端部にある

みにて足る」といつた言葉は、直ちに移して日本國民に適用することが出來る。かの美しき希臘の山河は、かゝる熱烈なる愛國心を希臘市民の心の中に喚起したのであつた。彼等も亦日本民族と同じく氣候と風光とに惠まれてゐたのである。故に彼等は、古今千年の時の流を凌ぐ藝術と哲學とを創造すると共に、波斯百萬の大兵をテルモピレーの險に沮み得た三百の勇士を生んだのである。彼等の愛國心は、楠家一門の子弟を率ゐて吉野の孤壘を守つた正行の心に似通つてゐるではないか。あの蕞爾たるアテネが七十萬の人口をもつて、三千年後の今日、なほ地上十億の人類に光被するが如き偉大なるものを創造したことを思ふと、國土の民族に與へる影響の甚深なことが今更のやうに感得される。



惟ふに、日本民族の運命は、我等の祖先がこの美はしき山河に居を占めた時に約束されてゐる。我々の自然美に對する憧憬と、その憧憬が生んだ典雅な性情と、國土に對する燃ゆるが如き愛着と、衣食住のわづらひの少かつたこととから生じた理想主義的人生觀と、自然を客觀的に眺める習慣から生まれた現實正視癖と、現實正視から來た利用厚生思想とは、三千年の鎖國生活のうちに鍛錬陶冶されて、玲瓏たる一箇の寶玉と化したのである。かゝる不可思議にして特有なる思想と性格とを有する日本民族は、今や新しき世界の黎明を前にして、驚くべき役割のために選み出されようとしてゐるのである。（歐米大陸遊記）

## 二　春の心

賀茂真淵

加藤宇萬伎
江戸の歌人
安永六年（一七七七）
歿
年五十七

桔梗が原
長野縣東筑摩郡
洗馬附近の原
武田信玄と小笠
原長時とが合戰
した處

小澤蘆庵
京都の歌人
享和元年（一八〇一）
歿
年七十九

加藤千蔭
江戸の國學者
文化五年（一八〇八）
歿
年七十四

うらうらとはるかすみたる春のこころより
にほひいでたる山ざくらばな
加藤宇万伎

そのふのゆきむすびのばね平ありて
あさ風さむききさらぎの原
小澤蘆庵

たかねのは月と花とにたぐひなく
ひとり雲まのなごりなるかな
加藤千蔭

まみぶねはこぎてぞすいくだしこ



村田春海
江戸の國學者
文化八年（一八一一）
歿
年六十六

木下幸文
京都の歌人
文政五年（一八二二）
歿
年四十三

香川景樹
京都の歌人
天保十四年（一八四三）卒
年七十四
贈從五位

かすむあしたのあをぞらに
村田春海

心あてにみしたてる雲はふるとても
たもはわたるる時ぞふじのね
木下幸文

ゆきさえむこれわ花ある寺ぞかむ
松原ぐしよかねきこゆ
香川景樹

ゆきよりこそはうちれむ佐保ぐはの
さくれまうけるーら美はけれ

加納諸平
和歌山の歌人
安政四年(一五一七)
歿
年五十二

橘曙覽
福井の歌人
明治元年(一五二八)
卒
年五十七
贈正五位

姉崎嘲風
名は正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
帝國學士院會員
明治五年(一五三)
京都生

わたのみなかれ

雲かるわたるれっにあらしほを
面ふらせてくだらうがり

加納諸平

はれならす時あるこっとみれさるる
よるとうづあてさくさうびうる

橘曙覽

## 三　忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南



友
高山樗牛

清見潟
靜岡縣庵原郡興津町の海岸

三月
明治三十三年

風薰ずる日、友に擁せられて家を辭し故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上・艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消失せぬ。「健在なれ。」「再び早く相見ん。」との別の言葉は尚耳に響き、最後の握手今尚掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛交ふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りにき。嗚呼、かくて相別れし我が友今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見潟の邊にさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を

有渡の山　靜岡縣安倍郡久能山の別稱

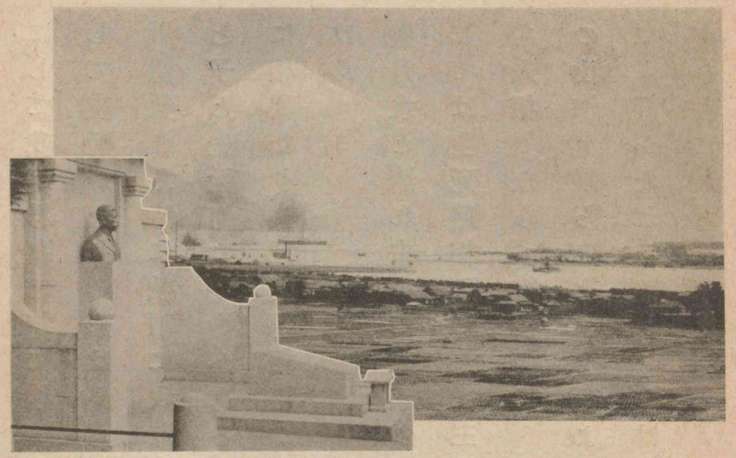
袖師の松原　三保松原の一部

埋骨の地　靜岡縣安倍郡不二見村龍華寺

踰えて駿州に入り、清見關の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、轉〻人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に遺し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山、影微かにして、袖師の松原、雨に朧なり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼の姿は今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜、五年前





龍華寺から見た富士山と櫻牛の墓

の今日の別離を偲んで彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。

されど徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂しみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薫新

にして我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど彼は我と語り、我は彼に接し、松風・濤聲また時に款晤に入り來る。嗚呼平生憂を同じうせる彼と予と、先世何の契緣かある。身世匆忙として相移り、際遇すでに相異なり、生死幽明相隔つといへども、彼と我と長へに相伴なはん。

歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ今宵一夜の眠に入らん。（停雲集）

三世　過去・現在・未來

我が友　京都帝國大學名譽教授文學博士　藤井健治郎

## 四　隱岐の御遷幸

三月七日　後醍醐天皇元弘二年（一九二）主上　後醍醐天皇

東洞院　烏丸の東の通り

櫻井　大阪府攝津國三島郡島本村の字山崎驛の西方

八幡　石清水八幡宮

明くれば三月七日、千葉介貞胤・小山五郎左衞門・佐々木佐渡判官入道道譽五百餘騎にて、路次を警固仕つて主上を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とては、一條頭大夫行房・六條少將忠顯、御介錯は三位殿御局ばかりなり。其の外はみな甲冑を鎧ひ、弓箭を帶せる武士ども、前後左右に打圍み奉りて七條を西へ、東洞院を下へ御車を軋れば、京中、貴賤男女小路に立並びて、正しき一天の主を、下として流し奉ることのあさましさよ。武家の運命今に盡きなん。と、憚る所なくいふ聲巷に滿ちて、只赤子の母を慕ふごとく泣悲しみければ、聞くに哀を催して、警固の武士も諸共に皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡を伏

拜み、御輿を舁据ゑさせて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化、百王鎮護の御誓あらたなれば、天子行在の外までも、定めて擁護の御眸をぞ廻らさるらんと、たのもしくこそ思し召しけれ。湊川を過ぎさせ給ふ時、福原の京を御覽ぜられて、平相國清盛が四海を掌に握つて、平安城を此の卑濕の地に遷したりしかば、幾程もなく亡びしも偏に上を犯さんとせし驕の未だ果さずして、天の爲に罰せられしぞかしと思し召し慰む端となりにけり。印南野を末に御覽じて、須磨の浦を過ぎさせ給へば、昔源氏の大將の、此の浦に流され、三年の秋を送りしに、「波只こゝもとに立ちし心地して、涙落つとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりにけり」と、旅寢の秋を悲しみしも、理なりと思し召さる。明石の浦の朝霧に遠くなり行く淡路

應化　佛が時に應じて本身を異體に變化して出現すること
湊川　今神戸市の内福原右に同じ
印南野　兵庫縣播磨國印南郡あたりの野
源氏の大將　源氏物語須磨の卷にある光源氏の事
明石の浦　ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に島隱れ行く舟をしぞ思ふ（古今集讀人不知）

杉坂　兵庫縣播磨國佐用郡江川村大畠より岡山縣美作國英田郡讃甘村に通ずる峠中山峠ともいふ
久米の佐羅山　岡山縣美作國苫田郡（もと久米南條郡）にある津山市の西南郊
鶏唱　鶏聲茅店月、人跡板橋霜。（唐の温庭筠）
三尾　島根縣出雲國八束郡美保關村

潟寄せ來る浪も高砂の尾上の松に吹く嵐、跡に幾重の山川を杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さら〳〵に、今はあるべき時ならぬに、雲の山に雪見えて、遙かに遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、「是は伯耆の大山と申す山にて候」と申しければ、暫く御輿を停められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は鶏唱に茅店の月を抹過し、或時は馬蹄に板橋の霜を踏破して行路に日を窮めければ、都を御出あつて、十三日と申すに、出雲の三尾の湊に着かせ給ふ。こゝにて御船を艤して、渡海の順風をぞ待ち給ひける。

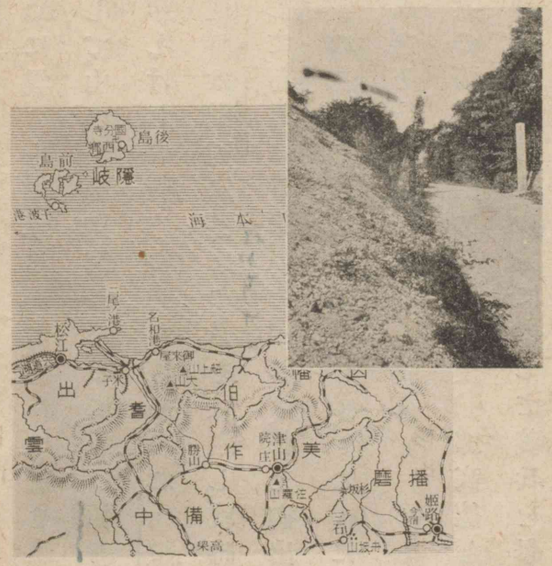
其の頃備前國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、味方に參じて義兵を擧げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され、楠木も自害したりと聞えしかば、力を失つても

志士仁人　孔子の語　論語にある

衛懿公が　衛懿公之時、有臣曰弘演者、受命而使。未反而狄人攻衛：攻殺懿公於熒澤、殺之、盡食其肉、獨舍其肝。弘演至報使、於肝畢呼天而號。哀止曰若臣者獨死可耳。於是遂自刳出腹實、內懿公之肝、乃死。……桓公聞之復立衛於楚丘。（韓詩外傳）

見義不爲　孔子の語　論語にある

だしけるが、主上隱岐國へ遷されさせ給ふと聞きて、貳心なき一族どもを集めて評定しけるは、『志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁。』といへり。されば昔、衛の懿公が、北狄の爲に殺されてありしを見て、其の臣に弘演といひし者これを見るに忍びず、自ら腹を搔切つて懿公が肝を己が胸の中に收めて、君の恩を死後に報いて失せたりき。『見義不爲無勇也。』いざや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ取り奉




船坂山舊蹟と御遷幸地圖



船坂山　岡山縣備前國和氣郡三石村と兵庫縣播磨國赤穗郡船坂村との境にある山　三石峠ともいふ

今宿　兵庫縣播磨國飾磨郡高岡町　姫路市の西方

三石　岡山縣備前國和氣郡三石村

つて大軍を起し、縱令屍を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へん」と申しければ、心ある一族ども皆此の議に同ず。「さらば路次の難所に相待つて其の隙を窺ふべし」とて、備前と播磨との境なる船坂山の嶺に隱れ伏し、今や〳〵とぞ待ちたりける。

臨幸餘りに遲かりければ、人を走らかしてこれを見るに、警固の武士山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らん」とて、三石の山より直違に、道もなき山の雲を凌ぎて杉坂へ着きたりければ、「主上はや院庄へ入らせ給ひぬ」と申しける間、力無く、これよりちり〳〵になりけるが、せめても此の所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して時分を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君

の御座ある御宿の庭に大きなる櫻の木ありけるを押削つて、大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫レ空二勾踐一、時非レ無二范蠡一。

勾踐　支那の周代の越の王　吳王夫差と戰つて會稽山に敗る　勾踐范蠡と謀り　隱忍持久多年兵を練り民を治め　遂に吳と戰つて之を滅す

兒島備後三郎高德
（小林永濯筆）

御警固の武士ども朝にこれを見つけて、「何事を如何なる者が書きたるやらん」とて、讀みかねて即ち上聞に達してけり。主上は軈て詩の心を御悟りあつて、龍顏殊に御快く笑ませ給へども、武士は敢へて其の來歷を知らず思ひ咎むることも無かりけり。」

都を御出　元弘二年（一九九二）三月七日

國府島　國府のある島の意か　隱岐の島後なる國分寺を行在所とせられたか

さる程に主上は出雲の三尾湊に十餘日御逗留あつて、順風になりにければ、船人纜を解いて御艤して、兵船三百餘艘前後左右に漕ぎならべて萬里の雲に溯る。時に滄海沈々として日西北の浪に沒し、雲山迢々として月東南の天に出づれば、漁船の歸る程見えて、一燈柳岸に幽かなり。暮るれば蘆岸の煙に船を繫ぎ、明くれば松江の風に帆を揚げ、浪路に日數を重ぬれば、都を御出あつて後二十六日と申すに御船隱岐國に着きにけり。佐々木隱岐判官清高國府島といふ處に黑木の御所を作つて皇居とす。玉扆に咫尺して召仕はれける人とては、六條少將忠顯・頭大夫行房、女房には三位殿の御局ばかりなり。昔の玉樓金殿に引替へて、憂き節茂き竹椽、淚隙なき松の壇、一夜を隔つる程も堪忍ぶべ

鷄人曉を唱へし聲　鷄人曉唱。聲驚二明王之眠一。（朗詠集、都良香）
萩の戸　清涼殿に在る御室の名

き御心地ならず。鷄人曉を唱へし聲、警固の武士の番を催す聲ばかり御枕の上に近ければ、夜の大殿に入らせ給ひても露微睡ませ給はず。萩の戸の明くるを待ちし朝政なけれども、曉毎の御勤、北辰の御拜も怠らず。今年いかなる年なれば、百官罪なくして愁の涙を配所の月に濺ぎ、一人位を易へて宸襟を他鄉の風に惱まし給ふらん。天地開闢よりこの方かゝる不思議を聞かず。されば天に懸る日月も誰が爲に明らかなることを恥ぢざらん。心なき草木も之を悲しみ、花さくことを忘れつべし。

（太平記）

長谷部信連　以仁王の忠臣　左衞門尉　建長六年（一九一四）卒　贈從五位

宮　高倉宮以仁王

五月　高倉天皇の治承四年（一八〇）

## 五　長谷部信連

さる程に、宮は五月十五夜の雲間の月を眺めさせたまひて、何の

三位入道　從三位入道源頼政

御所　三條高倉宮

三井寺　園城寺の別稱　近江國（滋賀縣）大津市にある名刹　天台宗寺門派の大本山

市女笠

行方も思し召し寄らざりけるに、三位入道の使者とて文持ちて忙しげに出で來る。宮の御乳母子六條の佐の大夫宗信これを取つて御前に參り、開いて見るに、「君の御謀叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ移しまゐらすべしとて、官人どもが別當宣を承つて、御迎に參り候。急ぎ御所を出でさせたまひて三井寺へ入らせおはしませ。入道もやがて參り候はん」とぞ書かれたる。宮はこの事如何せんと思し召し煩はせたまふ處に、宮の侍に長兵衞の尉長谷部信連といふものあり、折節御前近う候ひけるが、進み出でて申しけるは、「たゞ何のやうも候まじ。女房の裝束にいでたゝせたまひて、落ちさせたまふべうもや候らん」と申しければ、「この儀尤も然るべし」とて御髪を亂り、重ねたる御衣に市女笠をぞ召されける。六條の佐の大夫宗信傘持ちて御供仕る。鶴丸と

いふ童、袋に物入れて戴きたり。たとへば、青侍が女を迎へて行くやうにいでたゝせたまひて、高倉を北へ落ちさせたまふに、大きなる溝の有りけるを、いと物輕う越えさせたまへば、道行く人が立止つて、「はしたなの女房の溝の越えやうや。」とて、怪しげに見まゐらせければ、いとゞ足早にぞ過ぎさせおはします。

御所の御留守には、長兵衛の尉長谷部信連をぞ置かれける。女房たちの少々おはしけるをば彼處此處へ立忍ばせて、見苦しきものあらば取りしたゝめんとて見る程に、さしも宮の御祕藏ありける小枝と聞えし御笛を常の御所の御枕に取忘れさせたまひたるをぞ、立歸つても取らまほしうや思し召されけん。信連これを見つけて、「あなあさまし。さしも君の御祕藏の御笛を。」と申して、今五町がうちにて追つついて參らせたり。宮斜ならず御

感ありて、「我死なば、この笛をば御棺に入れよ。」とぞ仰せける。「やがて御供仕れ。」と仰せければ、信連申しけるは、「只今あの御所へ、官人どもが御迎に參り候なるに、人一人も候はざらんは、むげに口惜しく存じ候。その上あの御所に信連が候と申すことをば上下皆知つたる事でこそ候へ。今夜候はざらんは、それもその夜は逃げたりなどいはれんこと口惜しう候べし。弓箭執る身は、かりにも名こそ惜しう候へ。官人どもに暫くあひしらひ、一方打破つて、やがて參り候はん。」とて、只一人取つて返す。

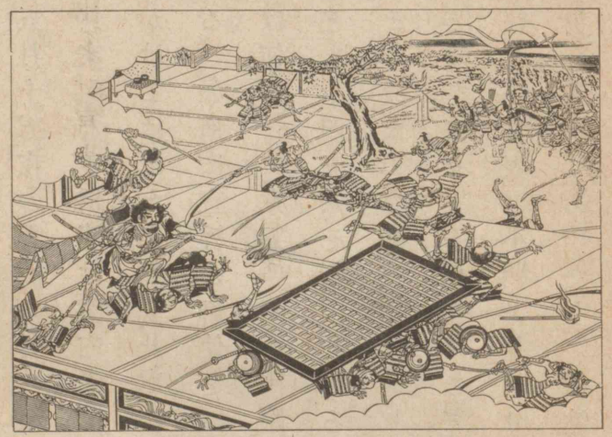
信連がその夜の裝束には、薄青の狩衣の下に萌黃匂の腹卷を着て、衛府の太刀をぞ帶いたりける。三條表の總門をも、高倉表の小門をも共に開いて待ちかけたり。案の如く源大夫の判官兼綱・出羽の判官光長、都合その勢三百餘騎、十五日の子の刻に宮の御所

へぞ押寄せたる。源大夫の判官は存ずる旨ありと覺えて、遙かの門外に控へたり。

出羽の判官光長は乘りながら門の内に打入れ、庭に控へ、大音聲を揚げて、「宮の御謀叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ遷し參らせんが爲に、官人どもが別當宣を承つて、只今御迎に參つて候。疾う〳〵御出候へ。」と申しければ、信連大床に立つて、「當時は御所でも候はず、御物詣で候ぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ。」といひければ、出羽の判官、「なんでふ、この御所ならでは、何處へか渡らせたまふべかんなるぞ。その儀ならば、下部ども參つて搜し奉れ。」とぞ申しける。信連重ねて「物も覺えぬ官人どもが申しやうかな。馬に乘りながら門の内へ參るだにも奇怪なるに、剩へ下部ども參つて搜し奉れとはいかでか申すぞ。長兵衞の尉長谷部信連が



候ぞ。近く寄つて過ちすな。」とぞいひける。廳の下部の内に金武といふ大力の剛の者、打物の鞘を外し、信連に目を懸けて、大床の上へ飛登る。これを見て同隷ども十四五人ぞ續いたる。信連これを見て、狩衣の帶紐引切つて捨つるまゝに、衞府の太刀なれども身をば心得て作らせたるを拔合はせて、散々にこそ振舞うたれ。敵は大太刀、大長刀で振舞へども、信連が衞府の太刀に斬立てられて、嵐に木の葉の散るやうに、庭へさつとぞ



長谷部信連の奮鬪
（源平盛衰記圖會）

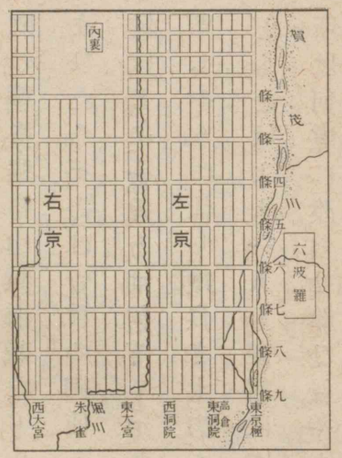
下りたりける。

五月十五夜の雲間の月のあらはれ出でて明かかりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者にてありければ、あそこの面廊に追つかけては、はたと斬り、此處のつまりに追つつめては、ちようと斬る。「如何に宣旨の御使をばかうはするぞ」といひければ、宣旨とは何ぞ」とて、太刀ゆがめば躍りのき、押直し、踏直し、矢庭によき者ども十四五人ぞ斬伏せたる。

その後、太刀の鋒三寸ばかり打折れて捨ててげり。腹を切らんと腰を搜せども、鞘卷落ちて無かりければ、力及ばず、大手をひろげて高倉表の小門より跳り出でんとする所に、大長刀持ちたる男一人寄りあつたり。信連長刀に乘らんと飛んでかゝるが、乘損じて股を縫ひざまに貫かれ、心は猛く思へども、大勢の中に取

宗盛卿
右近衛大將平宗盛
清盛の次子
重盛の弟

籠められて、生捕にこそせられけれ。その後、御所中に亂れ入つて搜せども、宮は渡らせたまはず。信連ばかり搦めて六波羅へ率てまゐる。



京都六波羅附近

前右大將宗盛卿、大床に立つて信連を大庭に引きすゑさせ、「誠にわ男は、宣旨の御使と名のるを、『宣旨とは何ぞ』とて斬つたりけるか。その上、廳の下部ども多く刃傷殺害したんなれば、能くよく糺問して事の子細を尋ね問ひ、その後、河原に引出して首を刎ねよ」とぞのたまひける。信連もとより勝れたる大剛の者なりければ、居直りあざ笑つて申しけるは、「この程あの御所を夜

な夜なものの窺ひ候を、なんでふ事かあるべきと思ひ侮つて用心も仕らぬ處に、夜半ばかりに鎧うたる者どもが二三百騎打入つて候を、『何者ぞ。』と尋ねて候へば、『宣旨の御使。』と申す。當時は諸國の竊盜・强盜・山賊・海賊など申す奴ばらが、或は『公達の入らせたまひたるぞ。』或は『宣旨の御使。』など名のり申すとかねく〳〵承つて候ほどに、『宣旨とは何ぞ。』とて斬つたる候。凡そ信連、物の具をも思ふやうに仕り、鐵良き太刀をも持つて候はんには、只今の官人どもをばよも一人も安穩にては還し候はじ。その上、宮の御在所は何處に渡らせ給ひ候やらん、知り參らせぬ候。假令知り參らせて候とも、侍ほどの者の一度申さじと思ひ切りてんことを、糺問に及んで申すべき樣なし。とて、その後は物も申さず。幾らも並みゐたりける平家の侍ども、あつぱれ剛の者や。これらをこそ一人當千の兵ともいふべけれ。と口々に申しければ、その中に或人の申しけるは、「あれが高名は今に始めぬことぞかし。先年、所にありし時、大番衆の者どもの止めかねたりし强盜六人に只一人追つかゝり、二條堀川なる處にて四人斬伏せ、二人生捕つて、その時なされたりし左兵衛の尉ぞかし。あつたら男の斬られんずることの無慚さよ。」と惜しみあへりければ、入道相國いかが思はれけん、「さらば、な斬つそ。」とて、伯耆の日野へぞ流されける。平家亡び源氏の世になつて、東國へ下り、梶原平三景時について事の根元一々に申したりければ、鎌倉殿神妙なりと感じたまひて、能登の國に御恩蒙りけりとぞ聞えし。（平家物語）

所
院の御所

入道相國
太政大臣平清盛
入道して淨海といふ

日野
伯耆國（鳥取縣）
日野郡日野鄕

鎌倉殿
源頼朝

高神覺昇
宗教家
智山大學教授
明治二十七年（一八九四）三重縣生

## 六　永恆の瞬間

高神覺昇

ライブニッツ　ドイツ哲學の祖　十七世紀の人

ヘラクライトス　古代希臘の哲學者（西暦前五三五頃―四七五頃）

時間といふものを考へる場合、私たちは常に過去とか、現在とか、未來とかいつた風に、一々それを切離して考へる。そしてその間にはなんら關係がないものの如くに。

試に今現在を基調として考へれば、現在は過去とも、未來とも手を繋いでゐる現在である。ライブニッツのいはゆる「過去を背負へる現在」であり、「未來を孕める現在」である。過去をいへば無限の過去、未來をいへば久遠の未來、それを背負ひ且孕めるものが、とりも直さずこの現在である、この意味において、少くとも現在は過去に對してはその結果であり、未來に對してはその原因である。即ち現在は無限の過去の到着點であり、久遠の未來への出發點であるわけである。

けだしヘラクライトスを待つまでもなく、「萬物流轉」といふことは、永久に眞理である。諸行はまさしく無常である。我も人も、人も物も、つねに生滅し變化して暫くも休むことはない。

ライブニッツ

從つて凡ては私どもにとつては一期一會である。一生一度、それが私どもの人生である。

思ふに私たちがもつ今日、それは永遠に歸り來らざる今日である。いはゆる永遠の今日であり、永恆の瞬間である。故に私たちにとつて最も大切なことは、「今」を生かすことである。永遠なる今日に目覺めることである。それが少くともほんたうに人生を哲學した人の態度であらねばならぬ。

芭蕉
松尾氏
名は宗房
俳聖
伊賀國（三重縣）
上野の人
文祿七年（一五九四）
歿
年五十一

筆蹟
涼風やほの三日
月の羽黑山　桃青

明日あり
明日ありとおもふ心の仇櫻よは
に嵐の吹かぬものかは（親鸞聖
人の歌といふ）

來年は
尾張露川の句

芭蕉が終焉に臨んでいつた言葉はまことに味はふべきである。「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、生涯いひ捨てし句は、悉くみな辭世である。」といふ、この芭蕉の心境こそ、眞に今日を摑んだ人であり、ほんたうに人生を凝視した人である。

芭蕉筆

おもふに、とかく私たちは「明日あり」といふその心持にひかされて空しく一日を過すことがある。「來年は來年はとて暮れにけり」とは、あながち一俳人のみの感慨ではない。げに私たちのもつその一日こそ、永遠に戻り來らざる一日である。永遠の一日である。

生涯いひ捨てし句はみな辭世の句だ、といふその態度こそ、眞に人生に徹した人の態度である。

古來「眞理は平凡なり。」といはれてゐる。まことに眞理は平凡である。宏遠なる宗教生活なるものも、つまりはこの「永遠なる一日」をよりよく生かすことであり。永恆の瞬間に目覺めることである。いはゆる永遠に立脚して刹那に努力するものこそほんたうに宗教の眞諦を摑んだ人であると同時に、それはまた正しく人生を深く味はつた人である。（眞理を歩む）



岡本綺堂
名は敬二
戯曲家
帝國藝術院會員
明治五年（一八七二）
東京生

## 七　夜叉王

元久元年七月十八日。

岡本綺堂

登場人物
面作師夜叉王
夜叉王の娘桂
同　楓
源左金吾頼家
從者下田五郎景安
修禪寺の僧

元久元年七月十八日
土御門天皇の御世（一八四）
この日頼家は北條時政の手で弑せられた
年二十三
修善寺村
今の靜岡縣田方郡修善寺村
建仁三年（一八三）八月源頼家母政子の爲にこゝに幽せられた

伊豆の國狩野の莊、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畠を隔てて、塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿（二十三歳）、跡より下田五郎景安（十七八歳）頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませぬが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は緣に腰を掛く。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に遣さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經れども出來せず。幾度か延引を申立てて今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　たかが面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家　予は生まれ附いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず。餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。子細をいへ、子細を申せ。

夜叉　御立腹恐入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇もなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家　えゝ、催促の都度に同じ事を……其の申譯は聞飽いたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までに

夜叉
梵語
捷疾鬼と譯す
羅刹
梵語
惡鬼と譯す

三島神社
靜岡縣伊豆國田方郡三島町にある
官幣大社
修善寺から北二十粁

は必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男・女・天人・夜叉・羅刹ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く、彼に通ひて始めて面も作られまする。但し其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上樣は御自身も仰せらるゝ如く至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止の無い事申上げたら御癇癖が愈募らう

程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

夜叉　ぢやというて出來ぬものはのう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者、たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に遺すのは、如何にも無念ぢや。

頼家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には……

頼家　んう、おのれ覺悟せい。



疳癖募れる頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。のう父様。

と顧みれども、夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

頼家　えゝおのれ、前後不揃の事を申立てて予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、嘘いつはりではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父様、もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんにさうぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を、いつ

そ獻上なされては……

僧　それがよい、〳〵。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、〳〵。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家無言にて心少しく解けたる體なり。



桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

賴家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を揚げる。

賴家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫しぢや。

賴家　んう。

と飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。これ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はは、、、。

夜叉王容を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々には其の面

を何と御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、あつぱれのものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　あつぱれとの御賞美は憚ながらおめがねちがひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……

夜叉　年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂も無き死人の相……それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面……　死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。而も眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈、怪異なんどの類……

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有難くお禮を申されい。

賴家　んう、とにもかくにも、此の面は賴家の意に適うた。持歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……

賴家　おゝ所望ぢや。それ。

頤にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、賴家に捧ぐ。賴家立つ、五郎も立つ。桂庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

賴家行きかゝりて物に躓く。

賴家　お、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、燈籠を持ちて出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　父樣、お見送を……

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

賴家等相前後して出行く。夜叉王起ち上つて、暫時默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。

楓は驚きて取縋る。

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　せつば詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは悔んで

夜叉王（劇）

も返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を遺さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り。再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人・上手でも細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でもあつぱれ

名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉　んう。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから愈〻精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

楓は縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。

日暮れて笛の音遠く聞ゆ。（綺堂戯曲集）

## 八　新　綠

五十嵐力

自然を見る眼が暗いのであらう。私が新綠の美といふものを心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうになつてからである。冬の中に寒肥などをやつて、花を待ち若芽

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稲田大學教授
明治七年（一八七四）
山形縣生



を待つもどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅い白い色々の花が咲く。そしてそれが散ると、今まで堅く結んでゐた芽が段々にほごれて來て、米粒・大豆粒位の小さな鱗片狀のつぎはぎの裡から、三寸・五寸・一尺・二尺といふみづ〳〵しい若枝が伸びだす、數枚・數十枚の透きとほるやうな若葉が開けて來る、木によつては尺にも餘る直徑の、化けさうな巨大な葉が、丁度手品師が小さい空箱から大きい雨傘を幾つも出すやうに、幾枚ともなく現れ出でて人を驚かす。

およそ植物の一年間の生活の中で、新綠の時分ほど、驚異を現すことはあるまい。而してその驚異が、一々吾等が平生の手當や心遣に反應して來る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸の枝の伸びる所にも、限りなき喜が湧いて來る。彼等のみづみ

づしい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心である。彼等の新しく成長する姿を見ながら、無駄枝・馬鹿枝を剪み切るのは、子供の身體から疣・瘤・腫物を除き去つてやる心である。柔かな枝の匂を妨げる古葉や枯枝を拂つてやるのは、子供の身體から髪を刈り、爪を切り、垢を洗つてやる心である。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひ落し、自然の風姿をほしいまゝにして、吾等を招くやうに枝を伸ばし、葉を伸ばすところを眺め、晩春の柔かい日光が透きとほるやうな薄綠の葉に濾されて、春溫の煙るやうな木の下陰をそゞろあるきする心の喜は、實に何ともいふことが出來ぬ。

花といへば紅い色を思はせるやうに、綠といへばすぐに青い色を思はせる。けれども「新綠」といふのは、無論新しい木の葉のあらゆる色を含めていふので、綠や青に限らない。「綠の錦」とは、この若葉の無數の色を一番力のある綠に統べさせた名前である。

新綠は紅・白・黃・紫など、花のもつて居る無數の色を殆ど悉く備へて居る外に、如何なる花ももつて居らぬ一つの色をもつて居る。それは「綠」である、「青い色」である。西洋では「青い花」といふ詞が、「世の中に無いもの」といふ意味に使はれて居るが、綠の色は、實に葉のみの有する特權である。「綠」は、造化が花に禁じて葉にのみ許した貴い色である。花に取つては禁色であり、葉に取つては「ゆるしの色」である。あらゆる色を許されて綠のみを許されなかつた花は、いかなる羨みの眼を以て葉を眺めて來たであらう。

貧しいながら總べての色を許された上に、禁色の綠を豐に許された葉は、如何なる誇を以て花に臨んで來たであらう。櫻が散つてから栗の花の欝陶しくにほふまでの五十日は、花に色の數數を盡くさせた上に、許しの一色を誇るための葉の季節ではなからうか。植物學者は花は葉の變形だと說いて居るが、さすれば葉といふ親が、自分に存在の意味を留めるために、この一色を美しい子に惜しんだのではなからうか。

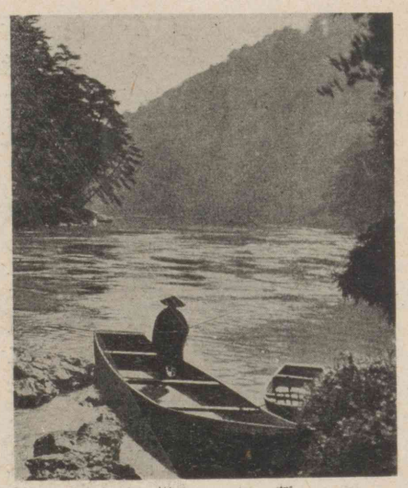
吾等は無盡藏なる水や空氣を貴ばぬごとく多きに馴れて綠の葉を貴ばぬやうになつて居るが、綠の色ほど人に好い感じを與へるものはない。そしてその綠の色の生粹を現したものが新綠である。新綠は人間が綠の色に馴れてこれを輕んじようとする心を驚かして、その絕大の價値を覺らしめようとする自然





の示威運動である。

家にのみ籠つてゐて、殆ど旅行といふものをしたことのない私は、まだ大山・大河・大平野などに於ける大舞臺の新綠の美に打たれたことがない。たゞさういふ景色で、一度は見たいとあこがれて居るのは、嵐山の新綠である。私は數年前四月はじめの櫻の盛に嵐山に遊んだことがあるが、あの櫻・楓が常磐木の間に織込まれ、長い枝を川の上に伸ばして、澄んだ淵に全き影を映し、淺瀨の白波に青い影を碎



新綠の嵐峽

かせて、渡月橋の上十町を裝つた景色がどんなだらうと思ふと、そゞろに胸の躍るのを覺えて來る。

新綠は私に取つて、實に花にも勝る喜である。野山の大きな景色は言ふに及ばず、猫の額のやうな小さい庭の新綠でも、尙わが小さい心に盛切れぬ喜と感謝とを湛へてくれる。（我執轉々記）

三木露風
名は操
詩人
明治二十二年（一八八九）兵庫縣龍野町生

斑鳩の宮
法隆寺東院なる夢殿
上宮王
聖德太子

## 九　斑鳩の宮

三木露風

やまとの國
上宮王の
いましし斑鳩の宮。
青葉して、
夏は今盛なり。



古きこの
あとどころ、
我は立ち、
昔しのべば、
白き日のかぎろひ
照れる中に
幼青し。
まだ稚き若草の文明日本に
吹きめぐる西域の薫は、
やはらかき詩の佛陀を

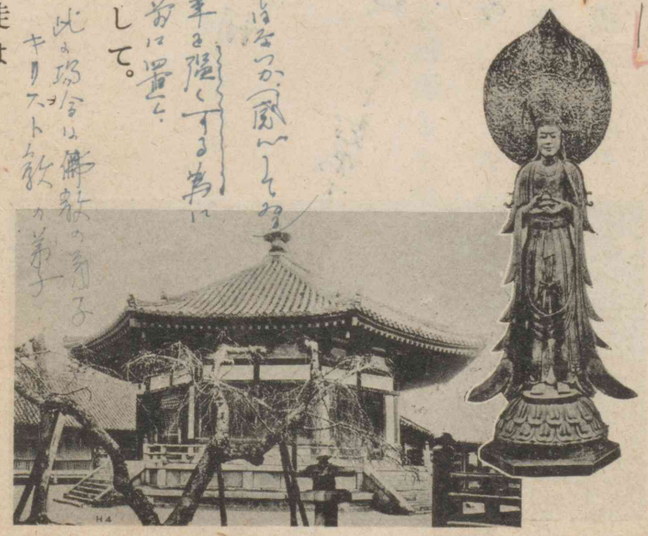
夢殿の聖德太子（安田靫彦筆）

金色にたゞよはせぬ。

「日出處の天子
日沒處の
天子に
書を致す。」
と
かの太子
は宣らす、
おごそかに國使をして。

覺哿や慧慈等の聖徒は

覺哿　高麗の僧
慧慈　高麗の僧　推古天皇三年（一三五）來朝　二人共に聖德太子の師



夢殿觀音と夢殿





衣を飜して來り、
藝術興り、文明進み、
憲法制定せられて、朝政革る。

美しき法隆寺は
千三百餘年の昔に建ちけらし。
嗚呼、大いなる日本のこゝろを示す
僧伽藍摩。

見つゝ我が
涙をながす、感激の涙
東天の菩薩太子、

僧伽藍摩　僧園　僧舍

法隆寺

觀音菩薩　阿彌陀如來　勢至菩薩

法隆寺金堂壁畫



君がせし功績のあとを。

やまとの國
上宮王の
いましし斑鳩の宮、
青葉して、
夏はいま盛なり。（青き樹かげ）

## 10 法隆寺

高濱虛子

法隆寺
奈良七大寺の一
推古天皇十五年
聖德太子御建立

高濱虛子
名は清
俳人
小說家
帝國藝術院會員
明治七年（一八七四）
伊豫國（愛媛縣）
松山生

法隆寺の金堂にはいつた。明かるい處から急に暗い處にはいつたので、初の間は何も見えぬ。漸くにして印度佛の後が見えて來る。眞四角な天蓋が見えて來る。だん〳〵と樣々な佛體

壁畫
筆者は未詳
鞍作部鳥ともいひ又は高麗の僧曇徴ともいふ

が見えて來る。案内者は壁の方を向いて、此の壁畫は朝鮮の僧何某が聖德太子の命を受けて描いたものだといふ。ただ眞黑な壁と思つてゐたが、成程壁畫がある筈だなと眸を据ゑて暗中を見ると、暫くして纔かにそれらしいものが眼に入る。よく見て居ると、頭らしいもの、顏らしいもの、手らしいものなどがだんだん見えて來る。人間よりも稍〻大きい位に描かれて居る佛樣が澤山あるのであつた。案

法隆寺金堂

内者は、此の彩色のうちの、丹いのは珊瑚末だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると、成程彩色がある。纔かに碧い色が見える、丹い色が見える。其處ばかりをじつと見て居ると、乏しい光線も自らこれのみに集つて來るかと思ふやうにだん〳〵其處が明かるくなつて來て、その丹碧の色は浮出るやうに眼に入る。固より千年以上の歳月を經た畫だ。剝げて居る、燻つて居る、輪郭さへ明らかで無い。それ

法隆寺金堂の壁畫

に拘らず、その丹碧の色は鮮かに眼に入る。千年の古色を呈して尙その中に鮮明な光を湛へて居る。余は生を此の世に享けて以來、未だかゝる重みのある、そして鮮明な色を見たことが無い。その筈だ、珊瑚を粉にした珊瑚末が壁土同樣、惜しげも無く磨りこんであるのだもの。

余はそれから玉蟲の厨子も見た。印度佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。一として名高くないものは無い。佛體も一見た。何れにも恍惚として眼をつぶつたが、しかし此の丹碧の色ほど強く心を刺戟したものは無かつた。

それから金堂を出て夢殿の廊下を通つて居る時、りん〳〵〳〵と物が鳴つた。案内者が「あの鈴は金鈴といつて、黃金を澤山入れて拵へた鈴ださうです」といつた。その音の好さといつたら

迦陵頻伽
梵語
美音鳥
妙聲鳥
如來の音聲以外には天人の音聲も及ばぬ好い聲の鳥といふ

喩へようにも物が無い。此の法隆寺にあるどの佛體を叩いてもあんな好い音は出まい。極樂淨土で啼くといふ迦陵頻伽の聲も恐らくかうまではあるまいと思つた。それから廊下を傳つて寶藏の方へ行きかけると、又りん〳〵と鳴つた。あゝたまらない好い音だと、立止つて耳を澄ました。此の時ふと、今、案内者は鈴だといつたが、もし彼の金堂の壁畫の色が音を出したのではあるまいかと疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし（俳諧一口噺）

## 二　牡丹

春の海ひねもすのたりのたりかな　與謝蕪村

牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

與謝蕪村
本姓は谷口氏
夜半亭　號す
俳人
畫家
攝津國生
天明三年（一七八三）
歿
年六十八か



鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

蕭條として石に日の入る枯野かな

若葉して水白く麥黄ばみたりけり

五月雨やある夜ひそかに松の月　大島蓼太

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

山路來て向かふ城下や凧の數　炭太祇

犬にうつ石のさてなし冬の月

鶯や藪をへだてて朝日寺　黑柳召波

水仙や室町殿の五間床

大島蓼太
信濃の俳人
天明七年（一七八七）
歿
年七十

炭太祇
俳人
京都生
明和八年（一七七一）
歿
年六十三

黑柳召波
號は春泥舍
俳人
京都生
蕪村の門人

朝日寺
京都北野神社附屬の寺

室町殿
足利三代將軍義滿の「花の御所」をいふ

高井几董（キトウ）
京都生
寛政元年（一四四九）
歿
年四十九

千代女
女流俳人
加賀國（石川縣）
松任生
安永四年（一四三五）
歿
年七十四

高桑闌更
加賀國（石川縣）
金澤生
寛政十年（一四五八）
歿
年七十三

小林一茶
信濃國（長野縣）
柏原生
文政十年（一四八七）
歿
年六十五

繪草紙に鎭おく店や春の風　高井几董

山寺や緣の下なる苔清水　夏

朝顏につるべとられて貰ひ水　千代女

蜻蛉つり今日はどこまでいつたやら

川舟や雲雀啼き立つ右左　高桑闌更

枯蘆の日に〳〵折れて流れけり　冬

蟻の道雲の峯よりつゞきけん　小林一茶

けふも〳〵絲引きずつて蜻蛉かな

藤田東湖
名は彪
勤王家
水戸藩士
安政二年（一八五五）
卒
年五十
贈正四位

愼中
弘化四年（一八四七）から嘉永五年（一八五二）まで水戸に謹愼を命ぜられた

弘道館
水戸藩の學校
天保十三年（一八四二）德川齊昭これを開く



## 三　人の問に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投ものに預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右樣御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顏の至に御座候。

さて愼中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脫し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はこれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。

一、先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覺え候。謂はゆ

嶄然頭角
雖少年已自成人、能取進士第、嶄然見頭角。（唐の韓退之が柳子厚墓誌銘）
御國　水戸藩

る嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、尚又御噂承知致候へば、近年益々御研精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤に存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども大義未だ曾て君臣を忘れざる至情もだし難く、且は度々の御細書、御深意をも推察致し、旁〻心事ほゞ吐露仕候

藤田東湖

弘道館記
水戸侯德川齊昭が藩學弘道館を設けた由來を述べて水戸學の精神を明らかにしたもの

申す迄はこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却つて無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の樣なれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候樣にても、父子の中とくと致さざる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらずと存候。又少々書を讀み候へば何か子細らしき顏色を致し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劍槍等の藝一切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきかも相知らず候へども、かりそめにも神州尚武の域に生れ、且は武家の飯を食ひ候者は、右樣白面の書生は風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へど

も、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。しかし成るべきだけは、文武岐れず兼備これありたき事是亦勿論に御座候。

學問、事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか〳〵難物なり。僕が輩頑白に相成候へども、今以て學問・事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はば、貴兄などは妙齢の御事ゆゑ、必ず學問・事業の一致も御出來なされ候はん。隨分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致し候うては、萬卷の書を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る」と申すごとく讀みたき事に御座候。次第

十七史　史記　前漢書　後漢書　三國志　晉書　宋書　南齊書　梁書　陳書　魏書　北齊書　周書　隋書　南史　北史　唐書　五代史　二十一史　十七史及び　宋史　遼史　金史　元史

東坡　某讀二漢書一至レリ是凡三經三手鈔一矣。初則一段事鈔三三字一爲レ題、次則兩字、今則一字。（東坡外傳）

次第に後の世に生まれ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す樣に相成、末が末に相成候はば、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歷史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候樣相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尙又御勘考御尤に存候。

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歷史も本當に解し申されず候間、隨分御餘力

李太白長語
七言古詩惟子美不失初唐氣格而縱横有之。太白縱横往々强弩之末間雜長語英雄欺人耳。
（唐詩選序）

天地正大氣粹然鍾　神州秀為不二嶽巍巍嶪千秋　注為大瀛水洋洋環一洲發為萬丈樓　衆芳難與儔　凝為百錬鐵　鋭利可割鏗　蓋臣皆經羅　武夫盡好仇　神州孰失陷　振古有　天皇之風治六合　明德侔唐陽　不世奇汗隆　正氣時吐光　乃奏大連議　低徊排翠雲　乃助　明主斷　談笑伽藍中　郎將用之　宗社盤石安　清丸將用　妖僧肝膽寒　血拜龍口劍　廣使頭已分　血起西州觀　怒濤殲妖氣　志賀月明夜　陽為鳳輦巡　芳野戰酣日　又代。弟子也　或投鎌　倉窟　憂懷正慎　或伴櫻井驛　遺訓何慇懃　或守伏見城　一身當萬軍　或狥天目山　幽囚不忘　天升平二百載　斯年常日伸　然當

和文天祥正氣歌

には御修行御尤に存候。但し近來、長短句にてごまかし候詩流行致候處、唐詩選の序にも、李太白長語を用ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ。」と申候。今の流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右の類は先々御稽古これなき方と存候。

一、慶元以來、人物林の如く、豪傑も追々に出で候處、其の中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など、皆畏るべ

東夷の人
日本國夷人物茂卿、拜手稽首敬題二贊孔子眞一。
（徂徠集）

司馬溫公
北宋の司馬光
字は君實
謚して溫公といふ

朱文公
南宋の朱熹
字は元晦
謚して文公といふ

韓魏公
北宋の韓琦
字は稚圭
魏國公に封ぜられた

其身居生四十七人乃去人離亡
英靈未嘗泯長生天地有正氣叙
彝倫孰能扶卓立東海濱
出識尊　皇室孝敬事　天神
脩文兼奮武　誓掃清胡塵　一朝
天步移　邦家身先淪　頑鉄不堪擬
罪戾及西王　王王困荀蕭　天定
向誰陳　孤子遠埃塵　何以報先親
苞再二南　星獨有斯氣　隨逐手
離離　死生豈忍与　海嶽居仲付天
地生死又何悲　生前事　天定亦人
張四維　死為忠義鬼　極天護
皇基

弘化亡仲冬書于北總菊
飾郡小梅村適々
常陸隈

（藤田東湖賦並書）

く存候。併し右の内、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀不屆至極に御座候。新井も才氣絶倫に候へども、東都を張立て候志は惡むべく候。さ候へば、今に在つては右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に適ひ候樣、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者動もすれば唐人の事は丁寧に申し、司馬溫公・朱文公・韓魏公などと稱へ、さて新田

義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右樣の人をば、僕は每々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、迚も、書中に盡くしかね候故、まづその一端を擧げ候のみに御座候。

僕は最早貴地などへ出で候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參御對面等にて御歸鄉も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸鄉に相成候はば、種々存候だけの事は御切磋申すべく候。

先は今日は前文御申譯かたく一書を裁し候事に御座候。併しながら御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。（寺門誠所藏文書）

## 一三　ソクラテスの遺訓

穗積陳重

法學者
法學博士
東京帝國大學名譽教授
樞密院議長
男爵
大正十五年薨
年七十

ソクラテス
希臘の大哲學者
プラトンの師
（西暦前四七〇―前三九九）

アテネ
古代ギリシャ文化の中心であつた市

大聖ソクラテスの與へた最後の教訓は、實に國法の威嚴に關するものであつた。

今を去ること凡そ二千三百有餘年の昔、彼が單衣跣足の姿で、當時世界の文化の中心と稱せられて居つたギリシャのアテネの市中、群衆雜沓の各處に現れて、其の獨得の會話法に依つて自負心の强い市民を教訓指導し、特に青年輩の指導教訓に力を致したことは、甚だ顯著なる事實である。もとよりソクラテス自らは決して一世の指導者を以て敢へて自任して居たわけではない。唯人々と

ステラクソ

メレートス　悲劇詩人
アヌトス　アテネの人
（西暦前一三九九）
クリトーン　アテネの人

共に眞善の何ものなるかを知らうと欲したのであつた。しかしながら、彼の眞意を了解しない大多數の俗衆は、却つてソクラテスのために各自の自負心を傷つけられたものと考へ、これがために彼に對して怨を抱くこととなつたが、終に或機會を以て、彼は新宗教を輸入唱道して國教を顚覆し、且又詭辯を弄して青年の思想を惑亂する者であるといふ廉で訴へられることとなつた。かくてメレートスやアヌトスなどの詐言のために、とやかくといろ〳〵瞞着された結果、種々の裁判の末、我が大聖ソクラテスは遂に死刑を宣告せられることとなつた。

さて、いよ〳〵死刑が執行されるといふ日の前日になつて、ソクラテスの門弟の一人なるクリトーンはソクラテスに面會して、この不正なる刑罰を免れるために脫獄を勸めようと思つて、早朝その獄舍に訪ねて來た。來て見た所が、ソクラテスはさも心地好ささうに安眠して居つたのである。クリトーンは、師がその死期の刻々に近づきつゝあるにも拘らず、かく平然自若たるを見て如何にも感嘆の情を禁めることが出來なかつたが、やがてソクラテスの眠より覺めるのを待つて、脫獄を勸めた。

クリトーンは、裁判の不正なること、刑罰の不當なることを說いて、師がかく生命を保ち得られる際に、自ら好んで身を死地に投じてこれを放棄せられるのは、寧ろ惡事を敢へて爲さんとせられるものであつて、今甘んじてこの刑に就くのは、これ即ち敵人の奸計に黨するものであると謂はねばならぬと述べ、又この際、妻や子供等を見捨てるのは、師が平素から、子供を教養することの出來ない者を儲けてはならぬと言はれた垂訓にも悖るもの

であり、又この容易にして危險のない脱獄を試みないのは、畢竟善にして勇なる所業を爲さないものであるから、平生德義の貴ぶべきことを唱道せられた師としては、甚だ不似合なことで、自分は、師のためにも、はた又その友たるクリトーン自身のためにも、慚愧の念に堪へざる次第であると說き、尙その辭をつゞけて、

さあ、どうぞ此處を能く〳〵御考へ下さい。否、もう御熟考の時は已に過去つて居ります。――私どもは決心せねばなりませぬ。――今の場合、私どもの爲すべきことは唯一つだけ、――しかも、それを今夜中に決行せねばなりませぬ――若しこの機を外したなら、それは、とても取返しが附きませぬ。――さあ、先生、先生、どうぞ私の勸告をお聽入れ下さいまし

情には脆く、心は激し易いクリトーンが、かくも熱誠を籠めて、その恩師に對つて脱獄を勸めたのであつた。ソクラテスはその間、心靜かに、師を思ふ情の切なるこの門弟子の熱心な勸誘の言葉に耳を傾けて居たが、やがて徐に口を開いて、答へて曰ふには、

親愛なるクリトーンよ、汝の熱心は、若しそれが正しいものならば、その價値は實に量るべからざるものである。が、しかしそれが若し不正なものであるならば、汝の熱心の大なるに隨つて、その危險も亦甚だ大なるものではあるまいか。それ故余は先づ、汝の余に勸告する脱獄といふ事が、果して正しい事であるか、或は又不正の事であるかを考へる必要がある。余はこれまで、何時も熟考の上に、自分でこれが最善だと思つた以外のものには何物にも從はなかつたものであるが、それを今このやうな運命が俄に我が身に降りかゝつて來たからと

いつて、自分のこれまで主張して來た道理を、今更投棄ててしまふことは決して出來るものではない。否、却つて余に取つては、是等の道理は恆に同一不易のものであるから、余の從前自ら主張し、尊重して居つたことは、今も尚余の同じく主張し尊重するものであるのだ。

と述べ、尚言葉をついで、

唯生活するのみが貴いのではない。善良なる生活を營むのが貴いのである。他人が己に危害を加へたからとて、我も亦他人に危害を加へるなら、それは、惡を以て惡に報いるもので、決して正義とはいへない。してみれば、今汝が言ふやうに、假令アテネの市民等が余を不當に罰しようとも、余は決してこれに報いるに害惡を以てすることは出來ないのである。



と言ひ、又、

若し余がこの牢屋を脫走せんとする際、法律及び國家が來つて、余に、「ソクラテスよ、汝は何を爲さんとして居るか。汝が今脫獄を試みようとするのは、即ち汝がその力の及ぶ限り法律及び全國家を破壞しようとするものではないか。凡そその國家の法律の裁判に何等の威力もなく、また私人がこれを侮蔑し、蹂躪るやうな國家が、しかも尚能く國家として存立し、滅亡を免れることが出來ると汝は考へるか。」と問うたならば、クリトーンよ、我等はこれに對して何と答ふべきであるか。

と言ひ、尚これに次いで、國家及び法律を擬人して問を設け、國法の重んずべきこと、又一私人の判斷を以てこれに違背するは即ち國家の基礎を覆さんとするものであるといふことを論じ、更

にクリトーンに向かつて、

我等はこれに答へて、「然れども國家は已に不正なる裁判を爲して余を害したり」と答ふべきか。

と言ひ、クリトーンが

勿論です。

と言つたのに對して、

然らば、若し法律が、「ソクラテスよ、これ果して我等と汝と契約した所のものであるか。汝との契約は、如何なる裁判と雖も國家が一度これを宣告した以上は、必ずこれに服從すべしとのことではなかつたか」と答へたならば如何に。

と言ひ、更に又、假令惡しき法律にても、誤れる裁判にても、これを改めざる以上は、これに違反するは、德義上不正である所以の理

イストモス　コリント地峽にあるイストモス祭はギリシャ四大國民祭の一で二年毎に行はれた

を說破し、尙進んで、

凡そアテネの法律は、苟もアテネ人にして、これに對して不滿を抱く者あらば、その妻子眷族を伴なうて何處へなりともその意に任せて立去ることを許して居るではないか。今、汝はアテネ市の政治法律を熟知しながら、猶この地に留つて居るのは、即ち國法に服從を約したものではないか。かゝる默契を爲しながら、一たびその國法の適用が自己の不利益となつたからとて、直ちにこれを破らうとするのは、抑〻不正の企ではあるまいか。汝は深くこのアテネ市を愛するがために、これまでこの土地を離れたこととては唯一度イストモスの名高き競技を見るためにアテネ市を去つたのと、戰爭のために他國へ出征したこととの外には、國境の外へは一足も踏出した

ことはなく、彼の跛者盲人の如き不具者よりも尙他國へ赴いたことが少かつたのではないか。かくの如きは、これ即ちアテネ市の法律との契約に滿足して居つたことを明らかに立證するものではあるまいか。且又この默契たるや、決して他より壓制せられたり、欺かれたり、又は急遽の間に結んだものではない。若し汝がこの國法を嫌ひ、或はこの契約を不正と思うたならば、このアテネ市を去る爲には、既に七十年の長年月があつたではないか。それにも拘らず、今更國法を破らうとするのは、これ即ち當初の默契に背戻するものではないか。

と言うて、縷々自己の所信を述べ、

故にかゝる契約を無視すれば正義を如何にせん、天下後世の識者の嗤笑を如何にせん。若しクリトーンの勸說に從つて、



脫獄するやうなことがあれば、これ即ち惡例を後進者に遺すものであつて、却つて彼は青年の思想を惑亂する者であるといふ誹毀者等の僞訴の眞事であることを自ら進んで表白し、證明するやうなものではないか。

と言ひ、更に、

正義を忘れて子を思ふなかれ。正義を後にして生命を先にするなかれ。正義を輕んじて何事をも重んずるなかれ。

と說き、滔々數千言を費して、丁寧親切にクリトーンに對つて、正義の重んずべきこと、法律の破るべからざることを語り、よりて以て脫獄の非を敎へ諭したので、流石のクリトーンも終に辭なくして、この大聖の淸說に服してしまつたのである。（法窓夜話）

ヴェスヴィヤス　イタリーの活火山　ナポリ灣に臨む　高さ一二八二米　今電車が山頂まで通じる

森鷗外　名は林太郎　衛生學者で文學者　醫學博士　文學博士　陸軍軍醫總監　東京帝室博物館長　島根縣津和野生　大正十一年卒　年六十一

ナポリ　ヴェスヴィヤス　火山の西南十四粁餘

## 一四　ヴェスヴィヤス

森　鷗　外

熔巖は月あかりにて見るべきものぞとて、我等は暮に至りてヴェスヴィヤスに登りぬ。レジナにて驢を雇ひ、葡萄圃貧しげなる農家など見つゝ騎り行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端になりたる小灌木、半ば枯れたる草の莖もあらずなりぬ。夜はいと明かけれど、強く寒き風は忽ち起りぬ。將に沒せんとする日は熾なる火の如く、天をば黄金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群がれる島嶼をば淡青なる雲に紛はせたり。眞に是、一の夢幻界なり。灣に沿へるナポリの市は次第に暮色微茫の中に沒せり。眸を放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルプスの山脈氷もて削り成せるが如し。紅なる熔巖の流は、今や目睫に迫り來りぬ。道絶ゆるところに、

聖涙酒　葡萄酒の名

黑き熔巖もて被はれたる廣き面あり。驢馬は蹄を下すごとに、先づ探りて然る後に踏めり。既にして一つの隆起したる處に逢ふ。その狀、新に此の熔巖の海に湧出せる孤島の如し。されど其の草木は只丈低き灌木の疎に生ぜるを見るのみ。この處に山人の草寮あり。兵卒數人火を圍みて聖涙酒を飲めり。これは遊覽の客を守りて賊を防ぐものなりとぞ。われらを望み見て身を起し、松明を點じて導かんとす。劇しき風に焰は横さまに吹靡け

（ヴェスヴィヤス火山と其の火口）

られ、滅えんと欲して纔かに燃ゆ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の蹄に觸るゝもの多し。處々道の險しき谿に臨めるを見る。

既にして黑き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横たはりぬ。我等は皆徒立となりて、驢をば口とりの童にあづけおきぬ。兵卒は松明振翳して斜に道取りて進めり。灰は踝を沒し、又膝を沒す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾り落つるが故に、縱に列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一歩を進みては又一歩を退き、只一つ所に在るやうに覺えたり。兵卒は、「巔近し、今一息に候」と叫びて、我等を勵ましたり。されど仰ぎ視れば山の高きこと初に異ならず。一時ばかりにして纔かに巔に到りぬ。我は奇を好む心に驅られて、直ち



ルビー
紅寶石

に踵を兵卒に接したれば、先づ足を此の山の巔に着けたり」。巔は大なる平地にして、大小いろ〳〵なる熔巖の塊、錯落として途に横たはる。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。これ火坑の堤なり。火球の如き月は早く昇りて、此の丘の上に懸れり。我等の來路に此の月を見ざりしは山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黑煙を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相倚りて支持す。忽ち又千百の巨砲を放てる如き聲あり。一道の火柱直上して天を衝き、迸り出でたる熱石はルビーを嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に沒し、或は灰の丘に沿ひて顚り下り、また我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屏息して、これを見たり。

兵卒は、「客人たちは山の機嫌よき日に來あはせ給ひぬ」とて、我等を揮きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まんとす。忽ち見る、我等の往手に火の海の横たはれるありて、身幹數丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これ我等に先だてる旅客の一群なり。我等は手足を動かして熔巖の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の火とは岩の隅々に濃き陰翳を形づくりて深谷の觀をなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りて漸く進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは白き蒸氣騰上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔巖なり。風に觸るゝ表層こそは黑く凝り

たれ、底は尚紅火なり。この一帶の彼方には又常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。導者は我等一行を引きて此の火殼を踐ましめたるに、足跡炙るが如く、我等の靴の黑き地に赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透かし見るべし。

我等は彼の旅客の群に近づきて、之と同じく一大石の上に登りぬ。此の石の前には新しき熔巖流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其の幅は極めて濶し。蒸氣の此の流を被へるものは火に映じて殷紅なり。四圍は暗黑にして、空氣には硫黄の氣滿ちたり。我は地底の雷聲と天半の火柱と此の流とを見聞して、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。

我等は歸途に就きたり。此の時、身邊なる熔巖の流に、爆然聲あ

りて、陷穽を生じ炎焰を吐くを見き。されどわれはまた戰き慄ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、且滑り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覺えざりき。われも友も心に此の遊の徒事ならざりしを喜びあへり。促し立てて共に出づるに、風歛り月明らかなり。ナポリ灣に沿ひて行けば、熔巖の赤き影と明月の青き影と、波面に二條の長蛇を跳らしむ。」（鷗外全集―即興詩人）

即興詩人　丁抹の童話作家で小說家たるアンデルセンの作を森鷗外が譯したもの

吉村冬彥　本名は寺田寅彥　物理學者　理學博士　東京帝國大學教授　帝國學士院會員　昭和十年卒　年五十八

## 一五　地圖を眺めて

吉村冬彥

「當世物は盡し」で「安いもの」を列擧するとしたら、その筆頭にあげらるべきものの一つは陸地測量部の地圖、中でも五萬分一地形圖などであらう。一枚の代價十三錢であるが、その一枚から我



我が學べば學び得らるゝ有用な知識は到底金錢に換算することの出來ない程貴重なものである。今假にどれかの一枚を絕版にして、天下に撒布されたあらゆる標本を回收し、その唯一枚だけを殘して他は悉く燒いてしまつたとしたら、その殘つた一枚は少くとも數百圓、相手により場合によつては一萬圓でも買手があるであらう。

一枚の五萬分一圖葉は、緯度で十分、經度で十五分の地域に相當するので、その面積は勿論緯度によつてちがふが、例へば東京附近でざつと二十七方里、臺灣では約三十一方里、樺太では約二十一方里位に當る。

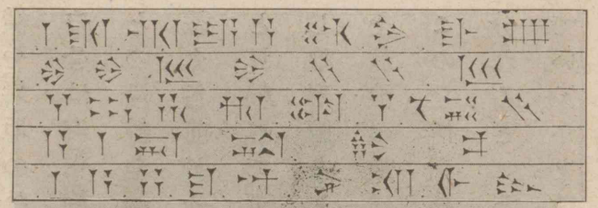
この一枚の地形圖を作る爲の實地作業に凡そどれだけの手數がかゝるかと聞いて見ると、地形の種類により又作業者の能力

アッシリヤ　古代メソポタミヤにあつた國
サンスクリット　古代印度の文語
梵語

により色々ではあるが、ざつと三百日から四百日はかゝる。それに要する作業費は二三千圓であるが、地形圖の基礎になる三角測量の經費をも入れて勘定すると、一枚分約一萬圓位を使はなければならない、その他にまだ計算・整理・製圖・製版等の作業費を要することは勿論である。

それだけの手數のかゝつたものが僅かにコーヒー一杯の代價で買へるのである。

尤も物の價値は使ふ人次第でどうにもなる。地圖を讀むことを知らない人には、折角のこの地形圖も反古同樣でなければ何かの包紙になる位である。讀めぬ人にはアッシリヤ文は飛白の模樣と同じであり、サンスクリット文は牧場の垣根と別に變つたことはないのと一般である。しかし「地圖の言葉」に習熟した人にとつては、一枚の圖葉は實にありとあらゆる有用な知識の寶庫であり、もつとも忠實な助言者であり、相談相手である。今、假に地形圖の中の任意の一寸角をとつて、その中に盛込まれただけのあらゆる知識を我等の「日本語」に飜譯しなければならないとなつたら、それは大變である。等高線唯一本の曲折だけでも、それを筆に盡くすことは殆ど不可能であらう。それが「地圖の言葉」で讀めば、たゞ一目で土地の高低・起伏、斜面の緩急等が明白な心像



एवं मया श्रुतं । एकस्मिन्समये भगवाञ्श्रावस्त्या विहरति स्म जेतवने ऽनाथपिंडदस्यारामे महता भिक्षुसंघेन सार्धमर्धत्रयोदशभिर्भिक्षुशतैरभिज्ञाताभिज्ञातैः स्थविरैर्महाश्रावकैः सर्वैरर्हद्भिः । तद्यथा स्थविरेण च शारिपुत्रेण महामौद्गल्यायनेन च महाकाश्यपेन च महाकप्फिणेन च महाकात्यायनेन च महाकौष्ठिलेन च रेवतेन च शुद्धिपंथकेन च नंदेन चानंदेन च राहुलेन च

アッシリヤ文字とサンスクリット文字

となつて出現するのみならず、大小道路の連絡や、山の樹立の模様や、耕地の分布や種類の概念までも得られる。

自分は汽車旅行をするときはいつでも二十萬分一と五萬分一との沿線地圖を用意して行く。遠方の山などは二十萬分一で悉く名前が分り、附近の地形は五萬分一と車窓を流れる透視圖と見較べて、可なりに正確で詳細な心像が得られる。しかし、もし地形圖なしで、これだけの概念を得ようとしたら、恐らく一生を放浪の旅に消耗しなければなるまい。

この夏信州星野溫泉から小瀨溫泉迄散歩したとき、途中で道の分れるところに一人若い男が休んでゐたので、小瀨へはこちらでいゝかと聞くと、それでは反對で、白絲の瀧へ行つてしまふといふ。どうも變だと思つて五萬分一に相談して見ると、やつぱ

星野溫泉
小瀨溫泉　共に長野縣（信濃國）北佐久郡にある溫泉
白絲の瀧　長野縣北佐久郡淺間山麓にある瀧



り自分の思つた方が正しい。それで構はず地圖の教へる通りに歩いて行くと、あとから先程の若い男が驅けて來て、「ちよつと勘違しました、どうもすみません、すみません。」といつて驅拔けて行つた。小瀨へ行つて見ると、その男はもうちやんと宿屋にをさまつて子供とピンポンをやつてゐた。人間は勘違したり、故意にだましたりしても、五萬分一地形圖はいつも正直である。

たまに、萬に一の地圖の誤を指摘して小言をいふ好事家があるにしても、陸地測量部地形圖の信用は小ゆるぎもしないであらう。唯一番面喰はされるのは、東京附近などで年々に新しく開設される電鐵軌道や自動車道路がその都度記入されてゐないことだけである。

東京附近へドライヴに出るとき氣のついたことは、大抵の運轉

ピンポン　卓球
ドライヴ　自動車を驅ること

アップ・ツ・デート　現代式　最新式

ベルリン　ドイツの首府

手が陸地測量部地形圖を利用しないで、却つて坊間で賣つてゐる不正確な鳥瞰的地圖を使つてゐることである。どうも地形圖の讀方をよく知らない運轉手が多いらしい。しかし又前記のやうに地形圖がアップ・ツ・デートでないためもあるかも知れない。

地形圖の價値はその正確さによる。昔ベルリン留學中彼の地の地理學教室に出入してゐた頃、一日某教授が「面白いものを見せてやらう」といつて見せてくれたのは、支那の某地の地形圖であつた。やはり二十メートル毎位の等高線を入れてあつたが、それが一見して殆どいゝ加減な出鱈目なものであるといふことが分つた。等高線の屈曲配布にはおのづからな法則があつて、いゝかげんなものと、正直に實測によつたものとは自然に見

スポーツ　運動競技

ヂャーナリズム　一般大衆の歡心を買ふことを目的とするもの

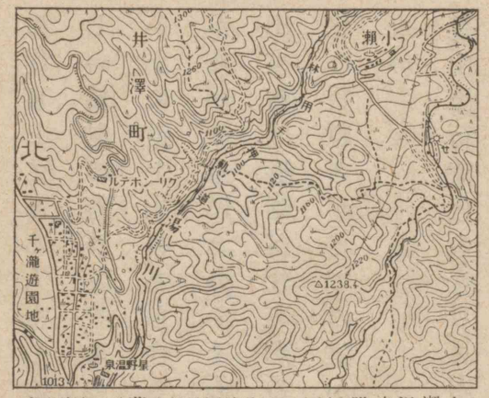
分けが出來るのである。

その時に痛切に感じたことは、日本の陸地測量部で地形圖製作に從事してゐる人たちの眞面目で忠實で物を誤魔化さない頼しい精神の有難さであつた。殆ど人跡未到な山の中の道のない所に道を求め、あらゆる危險を冒しても一本の線にも僞を描かないやうにといふその科學的日本魂のおかげであの信用の出來る地形圖が仕あがるのである。さういふ辛酸を嘗めた文化の貢獻者がどこの誰かといふことは測量部員以外誰も知らない。

登山流行時代の今日、スポーツの立場から嶮岨をきはめ、未到の地を探り得てヂャーナリズムを賑はしたやうな場合でも、實は古い昔に名の知れない測量部員が一度はそこらを縱横に歩き

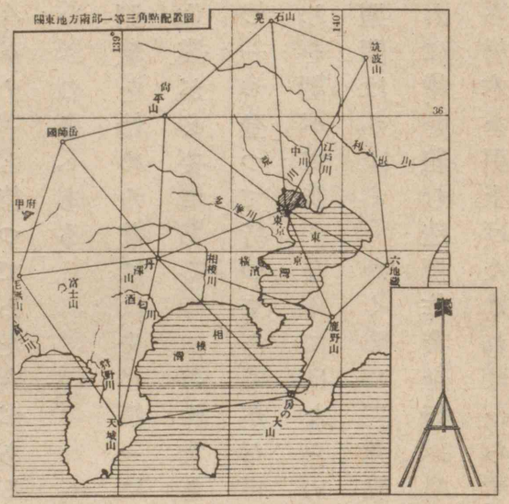
廻つたあとかも知れない。

上には上がある。測量部員が眞に人跡未到と思はれる深山を歩いてゐたら、鏽び朽ちた一本の錫杖を見つけたといふ話もあるさうである。




小瀬温泉附近圖　（陸地測量部五萬分一地形圖）

地形測量の基礎になる大事な作業は謂はゆる一等三角測量である。謂はゆる基線が土臺になつて、その上に謂はゆる一等三角點網を組立てて行く、これが地圖の骨格となるべき鐵骨構造である。その網目の中に二等・三等の三角網を張渡し、それに肉や皮となり雑作となる地形を盛込んで行くのである。この一等三角點にはみんな高い山の頂上が選ばれる。




一等三角測量圖と視標

その理由は、各三角點から數十キロ乃至百キロの距離にある隣接三角點への見通しが利かなければならないからである。それだから、三角測量に從事する人たちは年が年中普通の人は滅多に登らないやうな山の頂上ばかりを捜してあちらこちらと渡つて歩いてゐる。さうして天氣が悪くて相手の山頂三角點が見えなければ、幾日でもそれが見えるまで待つてゐなければ

毛無山
靜岡縣富士郡柚野村なる天子嶽の北につゞいてゐる山
標高一九四八米

天城山
伊豆半島の中央に聳える高山
標高一四〇〇米
レコード記錄

ならない。去る大正十二年に起つた關東震災後の復舊測量では、毛無山の頂上で二十八日間頑張つて、天城山が頭を出すのを今か〳〵と待つてゐた人がある。古いレコードでは七十日といふのさへある。

測量を始める前には、先づ第一に三角點の位置を選定する選點作業が必要である。この作業を行ふには、深山の峯から峯と一つ一つ登つて行つて、そこから百キロ以内の他の高峯との見透しを調べて歩かなくてはならぬ。一點を決定するのに平均二週間はかゝる。かくして三角點の配布が決定したら、次にはそれに櫓を組む造標作業を行ふ。場所によつては遠い下の方から材木を引上げなければならず、又見透しの邪魔になる樹木を伐らなければならない。これがためにも一點に約二週間はかかる。

櫓が出來たら少くも一年は放置して構造の狂ひを十分に落着かせ、それからいよ〳〵觀測にかゝる。一點における觀測作業に、天氣がよくても二週間位はかゝる。技師一人、技手一人と測量人夫六名乃至十名位の一行で天幕生活をする。場所によつては水汲だけでも中々の大仕事である。食料は米・味噌、その外に若布・切干・鹽魚などは贅澤な方で、罐詰などは殆ど持たない。野菜類の現場で得られるものは利用する。樺太ではいろ〳〵な植物を片端から試驗的に食つて見た人もある。溪流で小魚を摑みどりにしたり、野獸を射止めて思はぬ珍味にありついたりすることも折々はあるさうである。

北海道では熊におびやかされたり、食糧缺乏の難場で肝心の貯

テント　天幕

藏所をこの「山のをぢさん」に掠奪されて二三日絶食した人もある。道を求めて瀧壺に落ちて危く助つた人もある。暴風にテントを飛ばされたり、落雷の爲に負傷したり、その外、山崩れ、洪水などの爲に一度や二度死生の境に出入しない測量部員は少いさうである。それにも拘らず技術官で生命をおとした人は殆どないといふのは、畢竟多年の經驗による周到な準備と注意とによるものであらう。（寺田寅彦全集）

田部重治
英文學者
登山家
法政大學教授
明治十七年（一八八四）富山縣富山市生

## 一六　登山

田部重治

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を浮かべてゐる山相は、自然が作れる最も偉大なる藝術である。幾たび眺めても仰いでも、それは見る人に雄々しき心と氣高き理想と漲る血潮とを與へずにはおかない。山の姿ほど無私な心を以て、清淨な魂を以て、あこがれ得るものはない。

山を憧憬し、その姿に自らを空しうすることの出來る心に、純眞ならざるものはない。山を求むる心は、この偉大なる自然の藝術を通じて自然の魂と融け合ひ、それが最も活ける力であることを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絶えず行はれてゆく。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと思惟する文學者を多くもつてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、僞善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時代であつた。また、歐洲歴史上、自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。希臘文化の歴史に於て、最

も光輝ある文學藝術を生み出した時代、また文藝復興期、十八世紀末から十九世紀の初めにかけての浪漫的時代は、何れもそれであつた。

日本の歴史に於て、自然を最もありのまゝの姿に於て讃美し、氣高い山の姿に限りない渇望の眼を向けたものは、日本民族の最もあかるい、最も清純な情緒の源泉ともいふべき、かの萬葉の詩人であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一つの傳統となつて民族の一部には登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。即ち大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり凄まじい勢を以て社會の各方面に



動いてゐる。

かくしてあそこの山、こゝの溪谷は攀ぢられ探究された。のみならず、今まで顧みられなかつた文獻が引出され、山岳・溪谷に關する傳説が求められるに至つた。昔から登ることが不可能とされた山、足を踏入れることの出來ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、窮められないところが殆どなくなつた。

しかし山を眞に愛する人には、山を窮め溪谷を探り終へるといふことは、彼の山に對する悦の一小部分に過ぎない。彼の喜悦の大部分は、彼がこれらの自然に對して抱き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでも〳〵同一の山、同一の溪谷に對してすら湧出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、

かくして絶えず向上し進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

一たび頂上を窮めると、その山に對する興味を失ふ人、一つの山が持つ溪谷、深林、その美はしい色調、その朝夕の光線によつて全容に與へる變化、一歩々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多樣、そしてこれらの官能的に映ずる現象の下を流るゝ自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしない人は、自然を機械的に見る人でなければならない。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の抱く心は、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなければならない。

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に、質的に山岳に對して深まり行く情緒に存することを深く信ずるものである。（山と谿谷）



## 一七　鷲

土井晩翠

紫にほふ横雲の
露や染めけん花すみれ、
花に戯るゝ蜂・蝶の
愛か、恨か、うつし世の
はかなき春をよそにして、
大空のぼる鷲一羽、

土井晩翠
名は林吉
英文學者
詩人
第二高等學校名譽教授
帝國藝術院會員
明治五年（一八七二）
陸前國（宮城縣）
仙臺生

嵐は寒し、道さびし。

春の姿はたへなれど、
花の薫はにほへども、
その春よりもうるはしく、
その春よりもかんばしき
雲居のをちをめざしつゝ
大空高く鷲一羽、
嵐はきびし、道かたし。

背には無限の天を負ひ、
綠雲はねにつんざきて、



コーカサス　黑海とカスピ海との間にある山脈

天上の火　プロメセウスといふ火の神をさす

飛行くはてはいづくぞや。
望のあした持ちきたる、
高きかをりのあととめて、
大空めぐる鷲一羽、
嵐はつらし、道すごし。

嗚呼コーカサス峯高く、
千里の叢雲むらだちて、
下界のひゞきやむところ、
天上の火を奪ひ來し、
彼のたぐひか、青雲の
大空翔る鷲一羽、

横井也有
尾張名古屋の俳人
天明三年（一七八三）歿
年八十二

荘周
昔者荘周夢爲ニ胡蝶一、栩々然胡蝶也。自喩レ適レ志與、不知レ周也。俄然而覺、則蘧々然周也。不レ知下周之夢爲ニ胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上。（荘子）

古今の序
花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける（古今集序）

古池
古池や蛙飛込む水の音（芭蕉）

嵐ははげし、道遠し。（天地有情）

## 一八　百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限りなるべし。それも啼く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ荘周が夢もこのものに託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。おぼろ月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、このもののこと更にもそしりがたし。

蟬はたゝ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初

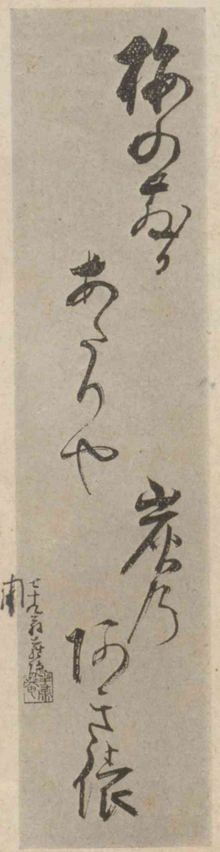
やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉）

筆蹟
梅の散るあたり
や炭のあき俵
七十九翁蘿隱

貧の學者
晋の車胤

蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は類ふべきものなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく、五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。



横井也有筆

夏　塘　群　蟲　伊藤若冲筆



茅蜩

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎてゆふべは草に露おく頃ならん。つく〳〵ぼふしといふ蟬はつくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

芋蟲は腹立つものにたとへ、毛蟲はむづかしき親父の號とす。背蟲・吝蟲は名のみにして蟲ならず。油蟲といふは蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼食ふ蟲は物ずきの謗となれり。

同じ實の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。

槐安の都

淳于棼醉ニ夢入ニ大槐安國ニ。見レ王。王曰吾南柯郡屈レ卿爲レ守。凡二十載。使者送ニ出レ穴。遂寤。尋ニ古槐下蟻穴ニ。乃槐安國。又一穴直上ニ南枝ニ。即南柯郡也。（異聞集）

蟷螂

欲以ニ蟷螂之斧一禦中隆車之隧上。（文選）

原・吉原

共に東海道の宿沼津の西

蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

狗の齒に嚙まるゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手に探らるゝ虱は免るゝこと難かるべし。

蟷螂のやせたるも斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひむく

竹林の七賢
嵇康　阮籍　山濤　尚秀　劉伶　阮咸　王戎

永田秀次郎
政治家
元拓務大臣
貴族院議員
拓殖大學々長
帝國教育會長
明治九年（一八七六）淡路國（兵庫縣）生
作者は關東大震災當時東京市長であつた

震災
大正十二年九月一日に起つた關東地方の大震災

つけき蟲にも、同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居珍しき夕始めて ほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、寂しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり、たく里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。（鶉衣）

## 一九　震災雜詠

永田秀次郎

燒け出されて離散した人、旅や外出の爲に家に居なかつた人たちは二日の朝から夜となく晝となく妻子や父母を搜して上野



増上寺
山號は三緣山
芝區芝公園にある淨土宗の大本山

淺草寺
山號は金龍山
淺草區淺草公園にある天台宗の名刹
本尊は名高い淺草觀音である

や日比谷や芝などを根氣よく見廻つて居た。到るところの柱や壁や銅像にまでも立退先の貼紙がべた〳〵と貼りつけられた。互に尋ね合つて居る間の心配と苦心とはどんなであつたらう。漸くにして廻り合つた時の嬉しさは又どんなであつたらう。罹災しない人には何としてもこの氣持はわからない。

露三日妻子に逢ひぬ增上寺

一夜、深更に市中を巡つて見た。滿目皆焦土、遙かに淺草寺の儼然たる黑き影が立つて居る。大空を仰ぎ見れば、銀河が斜に横たはつて萬籟寂たり、鳴くべき蟲も生殘つては居ない。

天の川の下に殘れる一寺かな

花の都の秋の月といふは名のみであつて、今年ばかりは雲井の月も照らすものなき一面の燒野原の眞中を、冷かに沈んで流れ

隅田川　武藏國荒川の下流　東京市荒川區千住以南の稱

行く隅田川の兩岸には、紅燈綠酒の夢の跡も今は空しく、倒れた燈籠や焦げた庭石に昔を偲ぶのみである。

焦土の底行く月の隅田川

燒跡を見廻つて居ると、堂々たる大きな邸宅が跡方も無く燒拂はれて、唯石の門柱と鐵の扉だけが嚴めしく殘つてゐるのを懇にも堅く鎖してある。隙間からは唯黑焦げの庭木と燈籠ばかりが見えて、秋風の渡る度に灰煙が捲起つて、鐵柵の目から外部へ吹出される有樣がいかにも物寂しく思はれた。

秋風や家燒けたるに鎖す門

馬場先門　舊江戸城內郭諸門の一　日比谷公園の北和田倉門の南

馬場先門內には、避難者の爲に數百のテントが出來た。天高く秋淸き日には、遠近の松の木の翠の間に、白妙の鮮かに彩られた樣はあはれにも亦心安げに見えた。明月のさやかに照らす秋の夜更けて、手に取る如くに近く二重橋を仰ぎ見た時は、何とはなしに、忝さに涙こぼるゝ心地がした。

松遠近茵の如きテントかな

勿體なや隣は月の二重橋

バラック假舍

俄作りのバラックの中で、雨の夕暮、風の夜半の住心地は如何であらうか。一夜野分の吹きすさぶ時、市吏員を數隊に分つて、自動車を驅つて各所のバラックを見廻らしめたが、幸に大いなる故障が無かつた。

バラックに人生きて居る野分かな

朝日を受けて、テントの坂を搾る白露がとぼり〳〵と芝生の上に落ちる。その下には子供や大人の下駄が立てかけて乾かしてある。それも古びた寄せあつめものと見えて、どれを見ても

片跛である。人の世の秋のあはれさがしみ〴〵と胸の中へ浸みわたる心地がする。

露けしやテントの外の跛下駄

庭木は皆燒けた。松など殊に枯れ易いと見える。震後一箇月の後に市中を巡つて見ると、櫻や楓の木の枝は皆燒けて、根元から新しい若芽が吹いて居るのがある。最も耐火力があつたかと思はれるのは銀杏と棕梠である。中にも棕梠は葉も幹も根も皆枯れてしまつたと思つて居ると、黑々に燒焦げた頭から、何時となく青々として勢のよい新芽がふいて來た。そして其の芽の針の尖にきら〴〵と露を含んで朝日に光つてゐるのを見ると、何となく生々した心强い嬉しい復興の氣分が湧いて來る。

燒けてなほ芽ぐむ力や棕梠の露

復興のバラックはお粗末ながら追々と建並んで行く。淺草方面は最も多數に出來た。十一月中旬には全市に十一萬戸ばかり建つた。市中を巡つて見ると、低い亞鉛屋根が連なつて居る中に、處々に燒殘つた煉瓦の建物が際立つて高く突立つて居る。その頂上の塔には大きな時計が附いて居て、どれもこれも十一時五十八分といふ時刻を指したまゝに殘つて居る。私は此の時計を見る度に、何時も厭な恐しい寂しい氣がしてならない。

行く秋やとまりしまゝの屋根時計　（青嵐隨筆）

## 二〇　東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやう〴〵近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き

逢坂の關
逢坂の關の清水にかげ見えて今やゆくらむ望月の駒（紀貫之）

遊子
遊子猶行二於殘月一函谷鷄鳴。（和漢朗詠集）

蟬丸
宇多天皇の皇子敦實親王の雜色琵琶の名人

藁屋
世の中はとてもかくても過してむ宮も藁屋もはてしなければ（蟬丸）

打出濱
今の大津市の内松本石場あたり

大津宮
滋賀郡滋賀村滋賀里にあつた大津市の北四粁

夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん函谷の有樣思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心を澄まし、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを侘びつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで心をとむるあふさか關山を過ぎぬれば、打出濱・粟津原など聞けども未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷りありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。



滿誓沙彌
笠朝臣麻呂養老頃の人

漕ぎゆく舟
世の中を何にたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとの白波（拾遺集）

さゝなみや大津の宮のあれしより名のみ殘れる志賀の故郷

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、「漕ぎゆく舟のあとの白波」誠にはかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝながめし跡をまたぞながむる

勢多の長橋（廣重筆）

野路　滋賀縣栗太郡老上村野路勢多の東四粁

南山の影　昆明春。昆明春。春池岸古春流新。影浸二南山一青滉瀁。波沈二西日一紅淵淪。（白氏文集）

かつみ　眞菰

飛鳥川の淵　世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集）

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして旅衣いつしか袖の雫ところせし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。むかひの汀、綠深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして滉瀁たり。洲崎處々に入りちがひて、葦・かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦・鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の篠原

武佐寺　滋賀縣蒲生郡武佐村長光寺

とこ　滋賀縣犬上郡鳥籠山また床山彦根町の北

遺愛寺　日高睡足猶慵レ起、小閣重衾不レ怕レ寒。遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看。（白氏文集）

醒井　滋賀縣坂田郡醒井村

行きくれぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけんとあはれなり。行末遠き旅の空、思ひ續けられていたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だにかたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水あまり涼しきまで澄渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて涼み合へり。かの西行が、

道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまり

つれ

と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木かげの清水むすぶとてしばしすゞまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底にも音づれ、山風、松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、鄙しき言の葉を殘さんもなかく に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀨川といふ處に泊りて、夜ふくる程に川端に立出でて見れば、

柏原
滋賀縣坂田郡柏原村

不破の關屋
岐阜縣不破郡關ヶ原町にあつた

後京極攝政
藤原良經
建永元年（一八六六）卒
年三十八

荒れにし後
人すまぬ不破の關屋の板びさしあれにし後はただ秋の風
（新古今集）

株瀨川
岐阜縣不破郡にある川
今は川筋が變つた

照る月なみ
水のおもに照る月なみをかぞふればこよひぞ秋の最中なりける
（拾遺集）

二千里の外
三五夜中新月色
二千里外故人心
（白氏文集）

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
帝國學士院會員
福井生
昭和二年卒
年六十一

秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月浪も數見ゆばかりに澄渡れり。「二千里の外の故人の心」思ひやられて、旅の思いとゞ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、

花洛を出でて三日、

株瀨川に宿して一宵。

しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、

かつ〳〵遠情を前途一千里の雲に送る。

など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しもかゝる旅寢の月を見むとは

（東關紀行）

## 二一　月雪花

芳賀矢一

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で日光の樣に峻烈ではない。日は仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して大小の有象・無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては誰しも人生の慰藉を感ずる、詩的情緒が油然として湧く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の陰、寒地の氷雪の家、眺める人の心は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の人の胸懷に



うちむかふ
荷田蒼生子の歌

しみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「打向かふ月は一つの影ながら、うかぶはちゞの思なりけり」である。東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向かつて訴へられた。之を嘆嗟し、之を吟咏した詩歌は世界各國の言語に充滿ちて居る。天文學者はいふ、「月は地球の衞星で全く死んだ冷塊である。」と。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

月　（瀧和亭筆）

花ならば　律師仙覺の歌

三千世界　宋の劉師道の詩

雪は月よりも一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相



違ない、花の散つたのちの新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたものではあるまいか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は決して我等の世界程樂しいものではないであらう。

雪　（瀧和亭筆）

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花

のさまざまどれを見ても美しいのが、四季につれ、咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花、野の花いづれも月や雪と同じ樣に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の內にも、床の間に一輪の花が必要である。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛しその清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人世を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々しい、華美、華麗、華奢等の語は皆花に

花をし見れば
年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし
（藤原良房）

やまざくら
康資王母の歌

基づいた語である。古今、東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。

花　（瀧和亭筆）

やまざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪にたとへたものである。

月雪花三つのながめは各々その特色がある。いづれを前、いづれを後といふことが出來ぬ。

冬ながら　清原深養父の歌

笠は重し　謠曲葛城の句

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪、靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家である。この地の人は寸紅の、眼を樂しませるものも持たない。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜

世々を經て　伊藤仁齋の歌

年々歳々　唐の劉廷芝の句

城の觀を呈して夜深を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花のながめは古人の歴史が加つて一層の感興が增す。

世々を經てながめし人の數にまたわれをもゆるせ秋の夜の月

月は古來の歴史を照らす鏡である。

年々歳々花相似、歳々年々人不同。

髮の霜、頭の雪。人生の感は花を見てます〳〵繁く、雪を見ていよいよ多いのである。

二千五百有餘年來、月雪花三つのながめを有し得るわれら祖先

北畠親房
吉野朝の忠臣
大納言
從一位准三后
正平九年(一三五四)
卒
年六十三
贈正一位
又の年
延元三年(一九八)
正月顯家は鎌倉
出發東海道から
美濃・伊勢・伊
賀を經て奈良に
入つた
顯家
親房の長子
延元三年(一九八)
戰歿
年二十一
贈右大臣從一位
親王
義良親王
後御即位あつて
後村上天皇と申
し奉る
男山
京都府(山城國)
石清水八幡宮の
鎭座する山

の遺蹟は、如何に多くの感興をわれらに與ふるよ、如何に多くの追慕をわれらに催さしむるよ。(月雪花)

## 二二　秋霧

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎭守府の大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀を經て、大和に入り、奈良の京になむ着きにける。これより度々の合戰あまたゝび互に勝負侍りしに、同じき五月、和泉の國にての戰に、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝにて極まりぬ。苔の下にも埋れぬものとては、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。心憂き世にも侍るかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

義貞
新田義貞

陸奥の皇子
義良親王

顯信
親房の次子
顯家の弟

國
陸奥國

異母の御兄
尊良親王は越前
金ケ崎で御自害
護良親王は足利
直義に弑せられ
給ひ宗良親王だ
け御在世

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向かはしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥の介鎭守府の將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまひ、道のほども忝かるべし、國にてはあらはさせたまへ」となむ申されし。異母の御兄もあまたましまし、同母の御兄も前東宮恆良親王・成良親王ましましに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば忝し。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮にこの由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日頃の事にや、上總の地

伊豆の崎　石廊崎イしらサキ　伊豆半島の最南端

内の海　霞ケ浦

近くより、空の氣色おどろ〳〵しく海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船行方知らず侍りけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船侍りき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。末の世には珍かなる例にぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合はせられて尊くも侍るかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。

舊都　京都　光明院おはす

冬　實は八月二十八日

ぬるが内　ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず（壬生忠岑）

仲尼　孔子の字　孔子は魯國の史記「春秋」を筆削して筆を獲麟に絶つた

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して暦應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の號なり。唐土にはかゝる例多けれど、この國には例なし。されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は固よりの皇都なり、内侍所・神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。

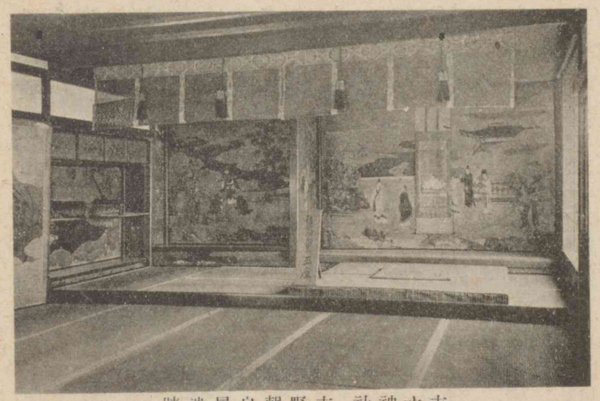
さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。ぬるがうちなる夢の世は、今に始めぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙も乾きあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたけれど、神皇正統の邪なるまじきことわりを、申し述べて、素意の末をもあらはさまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。

左大臣　關白左大臣藤原經忠

諸皇子　麑坂・忍熊の諸皇子

胎中天皇　應神天皇

かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第へ移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて後醍醐天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歳おましまし。



吉水神社　吉野朝皇居遺蹟

昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひしとき、行宮にて神さりましまし。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運ましましかば、百七十餘年、中絶えにし一統の天下を知らせたま

御怨念　玉骨はたとひ南山の苔に埋るとも魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ若し命を背き義を輕んぜば君も繼體の君に非ず臣も忠烈の臣に非じとて委細に綸言を殘されて左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ右の御手に御劍を按じて八月十六日の丑の刻に遂に崩御なりにけり（太平記）

今の帝　後村上天皇

元弘三年　後醍醐天皇の御代（九九三）

源長年　名和長年

船上山　鳥取縣（伯耆國）東伯郡に峙つ山

ひて、御目の前にて日嗣を定めさせたまひぬ。功もなく德もなき盜人世をとりて、四年餘りがほど宸襟を惱まし、御世を過させたまひぬれば、御怨念の木空しく侍りなむや。今のみかど亦天照大神よりこの方の正統を受けましましぬれば、この御光に爭ひ奉る者やはあるべき。なかなかかくて鎭るべき時の運とぞ覺え侍る。（神皇正統記）

## 二三　月の夜さむ

題しらず　後醍醐天皇御製

忘れめや寄るべもなみの荒磯を御船のうへにとめし心は

この御製は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ給ひける時源長年御迎へに參りて船上山といふ

爲定
藤原氏
歌人
新千載集の撰者

處へなし奉りける程の忠例なかりし事など記し
おかせましましけるものの奥に書添へさせ給ひ
けるとぞ
元弘三年九月十三日三首の歌講ぜられし時月前の擣
衣といふことを題としてよませ
聞きわびぬはつき長月ながき夜の月の夜さむにころもう
つ聲　百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へ遣はさ
れける中に　後村上天皇御製
あはれはや浪をさまりて和歌の浦にみがける玉をひろふ
世もがな
吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に山花
吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に山花

土佐國
元弘二年（一九二）北條氏の爲に土佐國幡多に流され給ひ翌年御歸京
尊良親王
後醍醐天皇の皇子
延元二年（一九七）越前金ヶ崎城で御自害
宗良親王
後醍醐天皇の皇子
新葉集の撰者

といふ事をよませ給ひける
長慶天皇御製
わが宿と頼まずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ
土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に海邊の霞を
中務卿尊良親王
春がすみかすむなみぢはへだつともたよりしらせよ八重
の潮風
東の方に久しく侍りて只管武士の道にのみたづさわり
はりつゝ征東將軍の宣旨など下されしも思の外な
るやうに覺えてよみ侍りし　中務卿宗良親王
おもひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむも
のとは

籠打指原
埼玉縣（武藏國）入間郡所澤の西四粁

新待賢門院
後醍醐天皇の中宮藤原廉子

文貞公
藤原師賢
吉野朝の忠臣
大納言
延元二年（一九七）卒
年三十二
贈太政大臣

同じ頃武藏國へ打越えて籠手指原といふ處におりゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよしつはものどもに仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし

君のため世のためなにか惜しからむ捨ててかひある命なりせば

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見てよませ給ひける　新待賢門院

時しらぬなげきのもとに如何にしてかはらぬ色に花の咲くらむ

元弘元年八月俄に比叡山に行幸なりぬとて彼の山に登りたりけるに湖上の有明ことにおもしろく侍りければ　文貞公

おもふことなくてぞ見ましほのゝと有明の月の志賀のうら波

（新葉和歌集）

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十一年（一八七八）新潟縣生
石川啄木
名は一
歌人
新聞記者
岩手縣生
大正元年歿
年二十七

## 二四　縮むものの力

相馬御風

故人石川啄木の歌に、

一晩に咲かせて見むと梅の鉢を火にあぶりしが咲かざりしかな

といふのがある。此の歌を時々私は思ひ出して口ずさむが、そのたびに私はまづ此の一首の歌に籠められた作者の皮肉な心持に一種の輕い苦笑を誘はれるのである。しかし其の苦笑感は忽ちにして作者その人に對する痛ましさの感じに變つて、私を深い憂鬱にさへ陷れることがある。

「何といふ痛ましい焦燥であらう。」

かう私の心が叫ぶと同時に、私は石川啄木その人のあの晩年の苦悶生活の底知れぬ暗さを思ひやらずには居られぬのである。

石川啄木
（五味清吉筆）

花は咲くべき時に到らなければ決して咲かない。咲くべき内部の力が充實し切つた瞬間に達しなければ、花は決して咲きはしない。それを火にあぶつてまでも無理に咲かせようとして焦り狂つてゐる其のいらだたしい心、それほど惱ましい心がまたとあらうか。



それについて思ひ出すのは、嘗て私は長い北國の冬籠りのわびしさの中にあつて、鉢植にして置いた雛菊の花の唯一輪開くのを見ただけの事によつて、限りなく大きな歡を與へられた事についてである。私はその時の經驗について、當時次のやうなことを何かに書きつけたと記憶する。

ほんのりと雪明りのさしてゐる窓際の臺の上に置いた鉢植の雛菊が、やうやく一輪だけ咲いた。いかにもやはらかさうな綠の葉の間から二寸ほどの莖を眞直に伸して、その上に白い小さな花が小首をかしげながら咲いてゐる。僅かにこの小さな一鉢の春の草を眺めてゐるだけでも、私にとつては測り知るべからざる歡がある。花は無論部屋のぬくみがあればこそ咲いたのだ。しかし、又それは單にぬくみだけで咲い

たのではない。曇硝子を透して來る光線も、無論それに與つてゐる。けれども花はやはり花それみづからの生命の力の充實を俟つて始めて咲いたのだ。外からの力がいかに加つても、內なる生命の充實を得なければ花は咲かない、花の咲くその最後の一瞬間の生命の充實――それを私は始めてしみじみと見入ることが出來た。僅かに一つの小さな鉢に植ゑられた此のさゝやかな生命あるものの働によつて、私の書齋全體がいかに活氣づけられたことか。

「花が咲いた。花が咲いた。」

子供たちまでが此の小さな一輪の花の咲いたことによつて、躍り上らんばかりの歡を與へられたのである。

私は今かうした其の時の私の氣持と、前に掲げた病詩人啄木の歌にこめられた悲痛な心とを比べて、今更のやうに深く考へさせられるのである。

「縮むものに彈力あり。」――私たちはよくさうした言葉を耳にする。そしてそれによつていつも深く自らを警められてゐるのを覺える。だが、私はそれを儼然たる一箇の事實として私の心眼に見せられたのは、前述の私の經驗によつてであつた。

固く結んだあの小さな花の蕾のうちにこめられた偉大な生命の力。それを感じさせられたあの瞬間の感激は、全く何といつて見やうもなく尊いものであつた。外に向かつて花と咲く力は實に內に向かつて貯へられるだけ貯へられ、籠められるだけ籠められた力の極致である。堅い地面を破つて小さな物の種

の芽の伸出る力、厚い殼を破つて卵の中から鳥の生まれ出る力、何れもこれ決して外に出ようとのみあせり立つた力ではなくして、内に籠れるだけ籠つた力の自らなる爆發に外ならぬ。縮めるだけ縮んだもののうちに充實しきつた力こそ此の世にあつての最も偉大な力ではないか。そんな事を私は同時に考へさせられたのであつた。

以前から私は角力を見ることが好きであつた。しかし、角力を見て居て私の最も壯快に感ずるのは、二個の人物の闘つてゐる情態や勝負の如何であるよりも、二人の力士が互に睨み合つたあの瞬間の緊張味である。土俵の眞中で二人の力士の睨み合つた瞬間に於ける肉體の緊張ほど美しい人間の肉體を私は他に見ることが出來ない。不斷見ると馬鹿々々しいまでに大きな體の持主であるその人も、あの瞬間に於てのみは少しも大きいといふ感じを與へない。縮まれるだけ縮まつてゐる。肉體のあらゆる部分に力が充實して、すべての筋骨が緊縮してゐる。恐らくあの瞬間に於ては、強弓の矢をも、彼等の肉體は彈き返すであらう。石を投げつけても傷つかないであらう。

だからこそ、角力を見るに巧者な人は、あの瞬間に於て既に勝負を見定めることが出來るのである。試に互に睨み合つた瞬間に於ける力士の體軀と、待つた！」といつて手を引き、立上つた瞬間の力士の體軀とを注意して比べて見たまへ。その間に何といふ驚くべき相違の有ることであらう。

内部に籠められた力に於て勝る時、人は往々戰はずして勝ち、闘

文覺　俗名遠藤盛遠　平安末期より鎌倉初期にかけての僧　山城國高雄神護寺に住した　正治元年（一八九九）寂　年八十

はずして他を服せしめることが出來る。西行法師を打たうとした荒行者の文覺が、西行法師の姿を見ただけで、その尊嚴にうたれて平伏したといふ話もある。徒に外部へ外部へと現れ出るもろ〳〵の力よりも、内に籠つて「信」となつた靈の力の如何に偉大であるかについての實話は、昔から數多くある。私たちはそこにもよく縮むものの彈力の強さを認め得るのである。

しかし、今日の社會を見渡す時、私たちはあまりに多くの人々が、徒に外部への力の濫費をしつゝあることを見る。かの石川啄木の歌のやうに、まだ咲くだけの力の充實に達しない花の蕾を火にあぶつてまでも咲かせようとしてゐるやうな焦燥に、あまりに多くの人々が煩はされすぎてゐる。安價な力の表現のいかに多すぎることよ。



此の意味に於て、私たちは現代の社會に向かつて、經濟上の緊縮以上に、肉體上の又精神上の力の緊縮の必要を感ずる。よく縮むものの強き彈力、それが今の社會には甚だ乏しい。角力でいふならば、睨み合ひが十分でない。ろくに睨み合はないうちに、いゝ加減に角力をとつてゐるやうな人があまりに多い。力を外へ働かすことばかり焦燥してゐる、内に力を充實させることを忘れてゐる。根強い働がなく、奥深い思考がない。つまり底力のある人や、底力のある働に乏しい。

底力のないといふことは、内奥に籠められてゐる力がないといふことである其の緊縮と充實とがないといふことである。

（靜と動との間）

# 二五　日本民族の覺悟

田中寛一

日本民族の前途は洋々として希望に滿ちて居る。併しこれは可能性である。この可能性を實現するには民族の各員の思慮と努力とを必要とする。徒に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を摸倣してゐたのでは實現は出來ない。日本民族の大使命を自覺し、その目標に向かつて精進することによつてのみ達し得られる。

フイエは歐洲各民族について考察した後、その結論として、「未來はアングロサクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又ラテン人のものでもない。最も聰明で、勤勉で、且最も道德的なものの掌中に歸すべきである。」といつて居る。日本民族の將來を思ふものは當にこの言を服膺すべ

田中寛一
心理學者
文學博士
東京文理科大學
教授兼東京高等
師範學校教授
明治十三年（一八八〇）岡山縣生

フイエ
佛國の哲學者
（西暦一八三一）

きである。

余は嘗て民族の將來に對する心理的條件を述べて、歡樂を追及し、贅澤に耽ることが、直接には民族を懦弱ならしめ、不道德に導き、物質尊重主義に傾かしめ、間接には人口減少を招來することを力說した。これは現代歐米諸國における一つの通弊であつて、我が國にもその潮流は刻々に押寄せて來て居る。「武士は食はねど高楊枝」の代りにマーデンの「金錢は品性なり」といふ格言を奉ずるものが我が國にも多くなりつゝあるのである。

文明の進步は諸民族間の交通を頻繁にし、個々人相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果は各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい

マーデン
米國現代の思想家

信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在來の道德思想が權威を失ひ、人々の行動がまち〳〵になり勝ちである。これは現代の諸民族が經驗して居る所で、各國の指導者が、その頭を惱ましつゝある問題である。思想の混亂・不統一も或場合には進歩の階梯となることがあるけれども、それが極端に走つて一民族の傳統を破壞し去るときには、その民族は自滅するのである。吾等はこの點に於て深く注意しなければならない。即ち傳統的な中心思想・中心感情は決して見失つてはならない、外來の思想や感情といふものは、たゞ傳統的なものに磨きをかけて、それを精煉する材料としてのみ用ふべきである。それで、外來思想に對する態度について一言しようと思ふ。

由來、人には古いものは之を棄てて新しいものに就かうとする心の一面がある。その好奇心を滿足せしめつゝ文化の發達に貢獻する意味で新しい思想の研究をするのは惡いことではない。併し、如何なる思想でも、その起るには相當な理由があることを忘れてはならない。彼の勞農ロシヤの過激思想の如きはロシヤに於て始めて發達すべきものであらう。即ち、時世後れの專制政治に對する反抗心の發露と見れば解釋がつくのである。又中華民國の一部に過激思想に共鳴するもののあるのは、彼等が元來利己的の民族であつて、國家或は民人の安寧幸福といふことは眼中にないものが多いからであらう。

總べて、思想でも何でも新しいが故によいといふものではない。これに反して歷史は尊い。蓋し歷史はその民族に適する思想の發現の跡であるからである。同樣に風俗・習慣・道德・宗教等も

亦その民族に適するものが生存したのである。この明らかな事實を無視して、徒に新を追うて外國の眞似をするのは決して賢い仕方ではない。

曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。その說によれば、澤庵のやうな滋養分のない消化の惡いものを食つて居れば國が亡びるといふのである。しかるに最近の學者の研究によれば、澤庵にはヴィターミンBをおほく含んで居るので、榮養の上に大切なものだといふことである。前の論者も、徒に西洋かぶれをしないで、澤庵を長い間食つた日本人が强健に壽命を保つて來たことを考へたならば、あのやうな論は吐かなかつたであらう。西洋崇拜者の議論には此の類のものが多い。注意すべきことである。たゞ我々の反省しなければならぬことは、風俗や習慣な



どの中にはその起る時には相當な理由があつても、時代を經過するに從つてその理由はとうの昔に消滅して、形ばかりが存續してゐることがあるといふ事實である。その樣な場合には適當な形に之を改良する必要がある。併し些細な習慣でも、それを變改するときには、その結果として如何なる影響があるかを先づ考へなければならぬ。些細な習慣の變改に對してすら此の樣に愼重に考へなければならないのである。況や民族の中心思想に影響を及す如き思想の研究者は極めて愼重な態度を執らなければならぬ。

日本民族の唯一の誇とする忠君愛國の精神、而して建國の最初から一貫して居る此の思想はその根ざす所は極めて深い、從つて少數の者の變態思想によつて動搖を來すことはないとは信

ずるけれども、世には附和雷同をするものも少くないことであるから、爲政者と教育家とは大いに注意しなければならない。

從來日本人が徒に外國人の行動を摸倣して得々として居たことは苦々しいことであるが、それには大いに理由がある。その原因を探して見ると、二つある。その一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの情勢であり、他の一つは日本の文化に對する研究の不足である。

西洋文明の特徴は主として自然科學の研究と其の應用とにあつて眼の前に容易に示されるものである爲に、彼と是との差のあることが解り易い。而もこれは從來日本に最も缺けた點であつた。西洋文明に始めて接觸した吾等の先輩が日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのは無理のないことである。其の後、自然科學の研究はその進歩に於て殆ど底止する所がなく、一歩否數十歩も後れて居た日本人は、唯單に彼等のやつたあとに追從して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因である。崇拜の結果は一も二もなく總べて彼等の行動はよいものと考へ、それを摸倣すること一日後るれば、一日時世に後れる樣に思つて、茲に摸倣に對する競爭といふ珍現象を惹き起したのである。誰も彼も一種の暗示にかゝつて、自己を反省することをしなかつたのである。

右の樣な情勢であつたから、その自然の結果として、日本文化に特有なものがあるか否かをさへ考へるものが少かつた。從つて日本文化の精髄の如何なるものであるかについてはまだ多くの人々は之を知らない。それは一つは自然科學の研究を摸

倣することに較べると著しく困難なことにもよるが、一部の人人を除いては、これを探究しようとする心さへも起さなかつたのである。而してその結果として傳統的の中心思想をさへ失はうとしたのである。

併し今や西洋文明の正體も略ぼ明らかになり、心ある人々は內に自ら省みて、日本民族特有の文化について之を明らかにしようとする樣になつた。今後は一方、西洋文化を研究しつゝ而もそれに囚はれず、他方、日本固有の文化について今一層深く研究してその美點と缺點とを明らかにし、東西兩文明の融合に向かつて大いに努力しなければならない。日本民族の大使命を果さうとするには、それだけの努力を惜しむべきでない。

余は西洋文明を自然科學的或は物質的文明といつたが、併しそれは一般的の言現し方である。彼にあつても我々の大いに學ばなければならない多くの精神的訓練がある。殊に日常生活に於ける對人的道德或は公衆道德に於て吾々の師とすべきものが少くない。

對人的道德の中で信用を重んずること、時間を守ること、汽車・電車等に於ける作法等に於て日本人は遺憾ながら英國人などに劣つて居るとおもはれる。併し、是は日本人が先天的に不正直であり、他人の迷惑を考へない民族である爲ではない。不正直なことについていへば、英國人でも今日の樣に世界に濶步する前には隨分不正直な者が多かつたのである。度量衡でも正しいものがなく、パンの目方を增す爲に鐵の屑を入れて燒いたこともあつたといふことである。而して外國貿易の發達につれ

て成金者流は單に利益を得ることに汲々として我が國の商業界より一層德義を重んじなかつたのである。然るに「正直は最良の政策」であるといふ教が出來た樣に、全く商賣をするには信用第一、正直第一でなければならぬことに氣がついて來て、漸次今日の樣に信用を重んずる風をなしたもので、決して最初から信用第一を標語とする國ではなかつたのである。我が國でもまだ外國貿易についての經驗が少い爲、時に見本の品よりも惡いものを輸出する樣なことがあるが、今や漸次眼覺めて來て居るから、遠からず信用第一の國になるであらうと考へる。

時間を守らないことについても次第に改善されて居るが、まだ十分でない。これも社會生活に慣れない結果であつて、今後の經驗によつて、結局は時間を嚴守することが自他の利益である



ことを會得する樣になるであらう。併し、これも自然の發達に任せないで、その改善を促進する樣に心掛けなければならない。

電車、汽車等に於ける作法に於ても、まだそれらに對する訓練を受けることの日が淺いために、他人の迷惑を顧みない態度が多いのであつて、日本人が先天的に不作法なのではない。又處構はず痰・唾を吐くことも不作法の一つであるが、これは肺結核の慘害を味はつて居る日本民族にとつては、不作法といふことの外に公衆衛生といふ見地から特に注意を促す必要がある。

要するに日本人の公衆道德上の缺陷は廣い範圍の社會生活に慣れないことから來るものが多いが、その理由で之を恕する譯には行かない。最高文明の建設者としては、此等の點に於ても亦優れて居なければならぬ。

今一つ注意すべき重要なことは科學の研究とその應用とについてである。我々は精神文化を高調するけれども、それと同時に科學的研究とその應用との重要をも認めるものである。日本には外國にない樣な尊い文化があるけれども、それだけでは優越民族にはなれない。その上に更に科學的知識を利用して生活の改善と能率の增進とを企てなければ、到底今日の世界の舞臺に立つて競爭することは出來ない。殊に我が國の如く天產物に於て餘り惠まれて居ない國では、生產の人的要素に於ける科學的知識の應用を一層努めなければならない。此の點については、我が國は近時著しい進步を見たけれどもなほ十分とはいはれない。



將來の大文明を荷なふ爲には日本民族の努力すべき尙多くの事項があるであらうが、要は現實に即しつゝ高遠の理想を追求せねばならぬのである。余は上述の事柄を總括し更にそれに關聯した數語を加へて我人の誡としたい。

長を採り短を補へ。これは日本民族の傳統的精神である。この精神を實現するには西洋文明について學ぶと共に日本固有の文明について一層深く究めて、そのよい點と惡い點とを明らかにしなければならぬ。

我等の力と使命とを自覺せよ。而して貧しいことを悲しむことなく、つとめて歡樂から遠ざかれ。「自己を愛するものは亡びる。」といふ訓言に聽け。

子孫の爲に自己を苦しめよ。一人よりも二人、二人よりも三人、三人よりも四人五人と、より多くの子寶をもて。然らば、その中から偉材の輩出する蓋然率は增すであらう。偉材こそ民族の寶である。平時にも戰時にも最も必要なのは多數の偉材である。

精神と共に身體を鍛へよ。心身の健全は日々の能率を增す資本であり、文化向上の源泉である。

志を固く持て。忠孝一致・忠君愛國は古來一貫した日本民族の中心思想であり、大和魂である。如何なる學說にも、我が民族にとつてこれに優る思想はない。

教育の振興と產業の發達とは國防の確立と共に民族發展の基礎である。各自その適する所について各、その素質を發揮して



最高文明の生產といふ日本民族の大使命を完成せよ。

四海同胞主義は人類究極の理想である。日本民族の精神文化の宣揚によつて世界人類を導いて協調の道程に上らしめなければならない。けれども正義は常に之を擁護する覺悟を必要とする。正義の戰に對する準備なき民族即ち現實を忘れた民族は結局高遠の理想に達し得ない。

現實に即しつゝ而も高遠の理想に向かつて精進せよ。これ日本民族の大使命を果す唯一の條件である。（日本民族の將來）

# 師範國文

第一部用　卷五　終

檢
年　月　日
學年　組



文部省檢定濟
昭和十三年三月十五日　師範學校國語漢文科教科用

昭和十二年十一月十五日印刷
昭和十二年十一月十八日發行
昭和十三年三月十日修正再版印刷
昭和十三年三月十三日修正再版發行

著作權所有

定價　一卷(一、二、三、四、五、六、八)金六十錢
○卷七　金五十七錢
一卷九、十　金五十五錢

編者　吉田彌平
補訂者　石井庄司
發行者　東京市神田區神保町一丁目五番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區神保町一丁目五番地　光風館書店
(電話神田三〇八七番)
(振替口座東京三二七番)
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　大日本印刷株式會社　根本力三

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接に御注文被下候はば直に御送本可致候

八月二十一日　雨

久しぶりで雨が降った。
今まで炎天の為草木は力を失って盛夏の緑色もどうやら失ってゐた様だったが雨の為盛夏の緑色をほんとに生々と表してきた。
池の鯉も雨降前には大きな口を水面に出せるだけ今はどこか逃げ去った事やら
夕飯をすましてふと空を見ると真圓い月が大空に一つぽつんと下町に涼しい光を發してゐた。
九時頃床に就く。次は夢の國へ
嘶の國へと!!……

八月二十二日　晴

昨日の雨もどうやら名殘惜しかった
井戸の水が今頃此の前から續く炎天の為に缺乏した。僕と弟はこれ位水を吸ふ為遠い井戸まで行かねばならぬ
どうか雨よ僕の為を思ってとでも言のたかった
後火谷と五もくました。
オルガンから歸って見ると尋二の時習った花の鹿雄先生がこられた
尚とも言へぬ新樹かしら

八月二十一日　雨

久しぶりで雨が降った。
今まで炎天の為草木は力を失って盛夏の緑色もどうやら失ってゐた様だったが雨の為盛夏の緑色をほんとに生々と表してきた。
池の鯉も雨降前には大きい口を水面に出せるだけ出せるだけ出せるだけ逃げ出した事やら
夕飯をすましてふと空を見ると真圓い月が大空に一つぽつんと下町に涼しい光を發してゐた。
九時頃床に就く。次は夢の國へ
嘶の國へと!!……

八月二十二日　晴

昨日の雨もどこへか名殘惜しかった
井戸の水が今頃此の前から續く炎天の為に缺乏した。僕と弟は汲出し水を吸出す遊、井戸まで行かねばならぬ
どうか雨よ僕の為を思ってとでも言のたかった
後犬谷と五もくました。
オルガンから歸って見ると尋二の時習った花田虎雄先生がこられた
何とも言へない氣持がした

春色微茫滑出吹殿微鑑

振鬚躁躁巔躑躅錯落進遮暗夜

慄心不斷 逆 鼓 嶮 嶮 嶮 屏風

嬢 避 色極 褪 せる 褪 世 陰 鬚 巖 躑

躅 陰上 陰上 平滑 觸

陰上 陰上 角 頻る 少 殼 ふ 踏 上 陰 陰

跡 象 踐 る 断 水 遠 見 陰

殷紅 沓 蟲

繚繞

遮暗夜

屏風

巖蟠

(ハ)